HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	最近のローザ・ルクセンブルク研究 : ポーランドにおける活動を中心として（20周年記念号）
Author(s)	伊東, 孝之
Citation	スラヴ研究, 20, 143-174
Issue Date	1975
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5054
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113016.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

最近のローザ・ルクセンブルク研究

—— ポーランドにおける活動を中心として ——

伊　東　孝　之

〔目　次〕

I.　序　言
II.　書　誌
III.　原史料
IV.　伝　記
V.　モノグラフ
　1.　ルクセンブルク論
　2.　SDKPiL 論
VI.　研究動向
　1.　国際社会主義運動におけるルクセンブルクの位置
　2.　ポーランド社会民主主義運動におけるルクセンブルクの位置
　3.　「ルクセンブルギズム」の問題
　4.　組織論と民主主義
　5.　経済分析と経済理論
VII.　結　語

I. 序　　言

ローザ・ルクセンブルクに関する文献は，近年急速に増えている。筆者は，3年前，ルクセンブルクの民族自決権概念を論ずる機会をもったが,[1] その後関連するテーマについて夥しい数の文献が現われ，また拙文を発表した時点では披見できなかったものの幾つかを入手し得たため，これらに筆者自身の立場から批判的コメントを加え，旧稿のうちとくに論争史の部分[2]をアプ・トゥデートなものとする必要があると感じた。したがって，本稿は基本的に旧稿の補遺という性格をもっている。しかし，旧稿においてはもっぱらルクセンブルクの民族自決権概念にかかわる問題を検討したが，本稿においてはルクセンブルクのポーランドにおける活動に関連する問題をとりあげてみたいと思う。ルクセンブルクの民族自決権概念はそのポーランドにおける活動と密接に結びついていたので，このようなテーマの移動はある意味では自然のなりゆきといってよいであろう。本稿においては問題の性質上，とくにポーランド語，ロシア語の文献に重点がおかれる。わが国において年々ルクセンブルクについて多くの論文が発表されるにもかかわらず，この革命家の思想と行動に決定的な刻印を与えたロシア＝ポーランド的背景についてなお本格的な研究が欠けている現状を見るとき，この方面の問題を検討することにいささかの意味が存するのではないかと思われる。

本稿においては，主として1970年以降に発表された文献が検討される。本稿はけっして網羅的であることを意図していない。また，ここに紹介されるものの多くは，なお刊行中であり，本稿もおのずから中間報告の性格を帯びることになろう。

II. 書　　誌

まず書誌について一瞥してみたい。ルクセンブルクの著作初刷については，すでにカチ

1) 『東欧の民族問題とマルクス主義の民族自決権概念——ローザ・ルクセンブルク——』，「スラヴ研究」，18号 (1973)，53-96.
2) 同論文，54-68.

ャノフスカとティフ,[3] ネトル,[4] バッソ[5]がそれぞれ書誌を作成しているが，1971年にティフが新たに72点を追加した。[6] また同じ年に，コハンスキがさらに10点を追加している。[7] 新たに追加されたものはスイス，ドイツ，ポーランド，ロシアの新聞・雑誌への投稿記事，社会主義インタナショナル大会，ドイツ社会民主党 (Sozialdemokratische Partei Deutschlands, SPD) 大会等における報告・決議，ポーランド王国・リトワニア社会民主党 (Socjaldemokracja Królestwa Polskiego i Litwy, SPKPiL) のビラ，同党の回状，書簡等からなり，ポーランドにおける活動に関するものが多い。これらの史料はとくにルクセンブルクのポーランド社会主義運動史論，ポーランド社会党 (Polska Partia Socjalistyczna, PPS) 批判，1910–14年の SDKPiL の党内闘争における立場，ロシア社会民主労働者党 (Российская Социал-Демократическая Рабочая Партия, РСДРП/RSDRP) の党内闘争，とくにボリシェヴィキの戦術に対する態度等に新しい光を投げかけるものと思われる。

ポーランドにおいては，目下初刷のみでなく，復刻・再版されたものや諸外国語への翻訳をも含めた，ルクセンブルクの全著作の書誌の編纂事業が進行中とのことである。[8] もしマルクス，エンゲルス，レーニン，スターリン，トロツキー等の著作の書誌[9] に匹敵するような完璧な書誌がルクセンブルクの著作についても作成されるならば，研究に裨益するところ甚だ大であろう。

ルクセンブルクの著作も尨大であるが，ルクセンブルクに関する文献は一層尨大であり，しかも急速に増大しつつある。もしルクセンブルクに関する文献の網羅的な書誌が作成されるなら，その有益さは疑う余地がない。残念ながら，このような大事業は，まだどの国

---

3) J. Kaczanowska (F. Tych による助言と協力)，„Bibliografia pierwodruków Róży Luksemburg (ローザ・ルクセンブルク初刷書誌)," *Z pola walki* (闘いの場から)，V (1962)-3, 161–226. なお筆者は現在刊行されている「ス・ポラ・ヴァルキ」誌の全巻を所持している。

4) J. P. Nettl. *Rosa Luxemburg*, London 1966, 863–917.

5) R. Luxemburg (L. Basso 編集), *Scritti politici*, Roma 1967, 635–698.

6) F. Tych, „Uzupełnienia do bibliografii prac (pierwodruków) Róży Luksemburg (ローザ・ルクセンブルク著作〔初刷〕書誌補遺)," *Z pola walki*, XIV (1971)-1, 241–246. もっともティフは1962年のカチャノフスカとティフの書誌に追加したのであって，筆者が点検したところでは，このうち27点はすでに1967年にバッソによって確認されている。ティフは，すべての作品についてルクセンブルクの著作と推定する根拠を明示している(主としてルクセンブルクのヨギヘス＝ティシュカ宛書簡，後註27を見よ)。バッソが1962年のカチャノフスカとティフの書誌に追加したもののうち2点はティフの確認を受けていない。またバッソがルクセンブルクの筆名の一つとした⚓という記号は，ルクセンブルクの変名の一つ Kotwiczka の著者記号であることが明らかにされている。

7) 1970年10月19日に「ス・ポラ・ヴァルキ」誌編集部の主催で開かれた討論会の速記録の中の A. Kochański の発言の部分に付記された書誌を見よ：„Spory ideologiczne wokół Róży Luksemburg (ローザ・ルクセンブルクをめぐるイデオロギー論争)," *Z pola walki*, XIV (1971)-1, 106–107, 脚註1. 10点のうち2点はティフの追加したものと重複している。コハンスキはこの他に従来たんに推量に基いてルクセンブルクの執筆とされていたもの，初刷場所・年度が不正確であったものなど4点について典拠をあげて確認・訂正している。

8) 前記討論会におけるコハンスキとソプチャク (J. Sobczak) の発言を見よ：同速記録，106, 110, 169.

9) 前三者についてはすでに無数の書誌が著わされているので，ここに紹介するまでもないが，スターリン，トロツキーについても最近非常に優れた書誌が刊行されている：R. H. McNeal, *Stalin's Works. An Annotated Bibliography*, Stanford 1967; L. Sinclair, *Leon Trotsky. A Bibliography*, Stanford 1972.

の研究者によっても企てられていないようである。テーマに即した限定的な性格のものは，ティフのルクセンブルク小伝[10]やシュトローベル[11]のモノグラフの巻末に付された書誌，わが国においては西川正雄氏の史料・文献紹介[12]を挙げることができよう。カレントな情報を得るには，ポーランド科学アカデミー歴史研究所刊の各年度別ポーランド史書誌，[13]「ス・ポラ・ヴァルキ」誌の新刊紹介，[14] ポーランド，ソ連の雑誌記事索引[15]が便利である。

III. 原 史 料

1970年以降に出版された原史料のうち特筆に価するのは，やはり東ドイツ版の著作集[16]であろう。この著作集には，はじめて公表される演説速記録，今日入手困難な新聞・雑誌・議事録等に発表された多くの論文・記事・発言，また「ロシア社会民主党の組織問題」[17]のような論争的な論文も収録され，それぞれに詳しい脚註が施されている。疑いもなく新しい著作集は今後のルクセンブルク研究にとって大きな価値をもつことだろう。しかしながら，ルクセンブルクのポーランドにおける活動に関心をもつ者にとっては，いささか期

10) 後註37を見よ。

11) G. W. Strobel, *Die Partei Rosa Luxemburgs, Lenin und die SPD. Der polnische „europäische" Internationalismus in der russischen Sozialdemokratie*, Wiesbaden 1974, 693–739.

12) 西川正雄，『ローザ・ルクセンブルク——史料と文献——』，「思想」，(1971)-1，120–133. 西川氏は「ス・ポラ・ヴァルキ」は「ルクセンブルクの発案で1905年に発行されたSDKPiLの新聞の名前として最初に登場する」としている(同論文，128，註15)が，これは不正確である。このタイトルが最初に登場するのは1886年にジュネーヴで刊行された「プロレタリアート (Proletariat)」党の指導者の裁判記録である：*Z pola walki*, 第1冊，Genève 1886. ついで1904年にロンドンでルクセンブルクの敵手 PPS が継続ものの予定で同じタイトルの労働運動史料集を刊行している：*Z pola walki. Zbiór materiałów tyczących się polskiego ruchu socjalistycznego* (闘いの場から，ポーランド社会主義運動史料集)，London 1904. ルクセンブルクの発案で刊行されたものは第3であり（これは到底「新聞」とは呼べない。最初は雑誌 *Czerwony Sztandar* (赤旗) の付録として出版されたのであり，1905年1～10月に僅か13号しか出ておらず，しかもまったく不定期であった)，第4はポーランド共産党の歴史研究誌 *Z pola walki. Pismo poświęcone historii ruchu rewolucyjnego w Polsce* (闘いの場から，ポーランド革命運動史専門誌)，Москва 1926–1934 (西川氏がこれについて1929年に創刊され，31年に休刊を余儀なくされたとしているのもやはり不正確である。西川氏の情報源はおそらく Nettl，前掲書，813，邦訳：諫山正他，「ローザ・ルクセンブルク」，2巻，東京〔河出〕1974–75, II, 386，および Basso 編集，前掲書，693–694であろう)，第5は1956年にポーランド統一労働者党 (Polska Zjednoczona Partia Robotnicza, PZPR) 中央委員会党史局 (Wydział Historii Partii) から出版された同名の冊子であり，現在刊行中のものは第6である。

13) Instytut Historii PAN, *Bibliografia historii Polski*, Wrocław 他。これは1948年から2～3年のタイム・ラグを伴いつつ，各年度別に刊行されている (1944–47年のものについてはまとめて1962年に刊行)。筆者は1970，1971，1972年のものを所持している。1973年のものはつい最近出版予告が出ている。*Zapowiedzi wydawnicze* (出版予告)，53/5300/1974を見よ。

14) „Nowe publikacji z historii ruchu robotniczego(労働運動史新刊図書)." これは各号に国際労働運動とポーランド労働運動に分けて掲載され，かなりの範囲をカヴァーしている。しかし選択の基準がかならずしも統一的でないのと時間的にかなり遅れて掲載されるものがあるのが難点である。

15) ポーランドについては *Bibliografia zawartości czasopism* (雑誌内容書誌)，月刊，Warszawa 1947–. ソ連については *Летопись журнальных статей*，週刊，Москва 1926–. 残念ながら前者はわが国の図書館では購入されていないようである。

16) R. Luxemburg, *Gesammelte Werke*, Berlin-Ost, 巻1–3，1970–1973. 巻5まで刊行される予定である。

17) „Organisationsfragen der russischen Sozialdemokratie" 〔1904〕, *Gesammelte Werke*, I-2, 422–444.

待外れの感を免れない。第1巻は比較的多くのポーランド語の論文を訳載しているが，巻を追うに従って少なくなっている。とくに第2巻のカヴァーしている時期（1906–11年）には，ルクセンブルクのポーランド語による執筆活動が盛んであっただけに惜しまれる。東ドイツの研究者が，ルクセンブルクその人よりもドイツにおけるルクセンブルクの活動に関心をもっていること，また本格的なモノグラフや書誌学的な研究が少ないこと等が著作集刊行にあたっての欠落となって反映しているように思われる。

このような欠落をある程度補ってくれるのが，西ドイツのヘンツェによって翻訳出版された論文集[18]である。しかし，これは戦後ポーランドにおいて選集あるいは資料集の形で刊行されたものの部分訳にすぎず，独自の史料調査を行なっていないため，ポーランドで不完全な形で刊行されたものをそのまま不完全な形で訳出するという不手際を犯している。[19]

ポーランドでは，1959年に出版された選集[20]の不備が指摘され，[21]完全な全集を求める声が強い。[22]そのための準備作業も進められているようであるが，まだ日の目を見ていない。

個々の著作の刊行は，世界各国で盛んに行なわれている。ここでは，すでになんらかの形で出版されたものの再版あるいは翻訳には言及せず，1970年代に初めて公開されたもののみをとりあげたい。

特筆に価するのは，1903–05年に執筆されたロシア語による未発表論文「ポーランドとロシアの社会主義，その相互関係」[23]の公刊である。RSDRP 第2回大会の開催を目前に控え，ロシアの社会主義者が活発な動きを見せはじめた1903年5月，ルクセンブルクは，ロシアの同志を啓蒙する目的で，ポーランドとロシアの革命的連帯の歴史とありかたを論じた一文を起草した。これは，「イスクラ (Искра)」誌に発表されることになっていた。しかし加盟交渉が失敗し，ロシアの運動との関係が冷却すると論文は発表のチャンスを失い，未完成のまま放置された。1905年末，第一次ロシア革命の最中に，ルクセンブルクは埃を

18) R. Luxemburg (J. Hentze による翻訳および序文), ***Internationalimus und Klassenkampf. Die polnischen Schriften,*** Neuwied/Berlin-West 1971.

19) 後註21を見よ。

20) R. Luksemburg, ***Wybór pism*** (選集)，2巻，Warszawa 1959.

21) すでに1961年にティフが書評においてその欠陥を指摘している。***Z pola walki,*** IV (1961)-2, 210–218, なかんずく 215–218 を見よ。1969年にはラドラクが「選集」の編集方針とヴェルフェル (R. Werfel) による序文を批判している：B. Radlak, „Stan badań nad dziejami SDKPiL（ポーランド王国・リトワニア社会民主党史研究の現段階），" ***Z pola walki,*** XII (1969)-1, 71. 1970年にコハンスキは，「選集」の最大の欠陥の一つを「民族問題と自治」論文を完全な形で公開しなかったことに見ている：„Spory ideologiczne ...," ***Z pola walki,*** XIV (1971)-1, 106. このことは筆者も旧稿（脚註24, 159）において指摘しておいた。遺憾ながらネトルも，この論文をドイツ語に翻訳したヘンツェもこれに気付かず，「選集」版をそのまま使用している。西川氏もまたこれを指摘せず，「選集」中の論文，とくに「民族問題と自治」が邦訳されることを期待すると述べている（西川，前掲論文，126)。この論文は事実1974年に邦訳されたが「選集」版に依拠しているため不完全である。R. ルクセンブルク（丸山敬一訳)，「マルクス主義と民族問題」，東京〔福村〕1974, 8–71 を見よ。

22) „Spory ideologiczne ...," ***Z pola walki,*** XIV (1971)-1, 109, 115.

23) «Польский и русский социализм в их взаимном отношении», P. A. Ермолаева と F. Tych によって校閲，***Archiwum ruchu robotniczego*** (労働運動文書)，Warszawa, I (1973), 30–72. 1973年に刊行され始めたこのシリーズはポーランド近現代史についての大胆な史料公開を行なっており，今後が期待される。

かぶっていた論文をとり出し，書き足し始めた。しかし，まもなくかのじょは，ロシア革命に直接参加するべくワルシャワに出発する決心をしたため，ふたたび執筆を中断することになった。1906年1月2日，ルクセンブルクは，ワルシャワからベルリンのカウツキー夫妻に自分の未稿論文の送付を依頼している：「机の上に，ヴォルテールの胸像と並んで，紙の山のなかに，細長い紙包みがあって，そのなかに，116ページくらいまで番号をうったロシア語で書いた私の原稿が入っています。……それが見つかりましたら，同じく書留の手紙として，ノヴィ・シフィヤトの私宛，御発送下さい。」[24]原稿は，事実ワルシャワのルクセンブルクの入手するところとなった。しかしルクセンブルクは，ふたたび稿を進めようとしていた矢先に逮捕され，原稿も他の文書とともにロシア警察の手に渡った。未稿論文は長い間失われたものと考えられていたが，1971年になってはじめてソ連の研究者によってその存在が突きとめられ，[25]ようやく1973年にポーランドで原文のまま刊行されることになった。この論文は，今日知られている範囲では，ロシア語で書かれた唯一のルクセンブルクの論文である。多分にポーランド語的表現が混っているが，充分理解に耐える。ルクセンブルクは，おそらく発表前にロシア語に堪能な同志に手を加えさせるつもりであったのだろう。この論文は，その内容から見て，「『プロレタリアート』党を記念して」[26]という論文および一連のPPS批判論文と関連しているが，他の論文においては使われていない多くの史料を引用しており，ルクセンブルクのロシア革命観，ロシアの運動との連帯についての考え方を理解するうえに欠かせない史料といえよう。

1970年代に公刊されたもう一つの重要な原史料は，疑いもなくヨギヘス＝ティシュカ宛の書簡集[27]第3巻であろう。第3巻に収められた書簡は，それまでのものと異って，ヨギヘス＝ティシュカとの個人的な関係が決裂し，党生活における協力関係のみが継続するという背景のもとで書かれている。相手への呼びかけが，親しい友人や恋人同志のあいだで使われるtyから，突然よそよそしく形式的なpan[28]に変わることや，ルクセンブルクがヨギヘス＝ティシュカの私宅（かつての共同生活の場）訪問を拒否し，これを試みようとする相手にしばしば抗議の手紙を書いていることなどは，二人のあいだの異常な関係を示している。このような個人的な悲劇を背景としているため，手紙の筆者は意識的に個人的な問題に立入るのを避け，話題を党務に関することに限定しようとしている。それがかえって，政治運動の史料としてのこの巻の価値を高からしめているといえよう。仄聞すると

24) R. Luxemburg (L. Kautsky 編集), *Briefe an Karl und Luise Kautsky (1896–1918)*, Berlin 1923, 81, 邦訳：川口浩・松井圭子，「ローザ・ルクセンブルクの手紙——カールおよびルイーゼ・カウキー宛——(1896年～1918年)」，東京〔岩波文庫〕1963², 93–94.

25) P. A. Ермолаева, А. Я. Манусевич, *Ленин и польское рабочее движение*, Москва 1971, 128.

26) *Pamięci ‚Proletariatu'* (旧稿脚註102において *Pamięci I Proletariatu* となっているのは誤植)〔1903〕，ドイツ語訳：„Dem Andenken des ‚Proletariat,'" *Gesammelte Werke*, Berlin-Ost, I-2, 306–362.

27) R. Luxemburg (F. Tych による編集・校閲・序文・註釈), *Listy do Leona Jogichesa-Tyszki*, 3巻, Warszawa 1968–1971.

28) 当時も今も党の同志のあいだではtyとpanの中間のWyが使われるのが普通である。ルクセンブルクがtyでもWyでもなく，あえてpanに固執し続けたのは相手との異常な緊張関係を示していると見てよいだろう。

ころによれば，この興味深い書簡集の邦訳事業が数年前から推し進められ，まもなく出版されるということであるから，ここで詳しく内容に立入る必要はないだろう。ここではただ1909–14年という，ルクセンブルクの学問と思想の展開，ポーランドとドイツの党における立場の変化にとって決定的な意味をもつ時期に書かれたこれらの書簡が，「民族問題と自治」，「経済学入門」，「資本蓄積論」等のルクセンブルクの主要著作の成立背景を示す貴重な史料であり，同時にRSDRPの再統一をめぐるボリシェヴィキとの対立の深刻化，他方におけるSPD指導部なかんずくカウツキーとの溝の深まり，SDKPiLの分裂，ラーデク(K. Radek)事件等の重要なドキュメントともなっていることを指摘するにとどめたい。ヨギヘス＝ティシュカへの書簡集3巻を通読して残る強い印象は，いかに執拗にロシア＝ポーランドの問題が一般にドイツの革命家として知られる人物の関心を占め続けたかということであろう。

ヨギヘス＝ティシュカ宛の書簡集ほど政治的な重要性をもっていないし，また個人的なドラマとも関係をもっていないが，しかしルクセンブルクのポーランド問題における立場を理解するうえで劣らず重要な意味をもっているのは，ヴォイナロフスカ(C. W. Wojnarowska)宛書簡集である。ルクセンブルクより一世代上の，「プロレタリアート」党以来の古い活動家で，SDKPiL内でしばしばルクセンブルクとポーランド問題をめぐって争った，この女性革命家宛の書簡31通は，1971年になってはじめて「ス・ポラ・ヴァルキ」誌上に発表された。[29]これらの書簡の欄間には1896年のインタナショナル・ロンドン大会を前にして，ポーランド王国社会民主党(Socjaldemokracja Królestwa Polskiego, SDKP. これはSDKPiLの前身)内にもちあがった論争，1900–01年にザレフスキ(S. Trusiewicz-Zalewski)を中心とする党内反対派グループの動きがルクセンブルクに与えた衝撃，同じ頃にルクセンブルクがSDKPiLの公式機関に一切参加を拒否するに至った経緯，PPS, RSDRP, ポーランド・ロシア在住ユダヤ人労働者総同盟(Algemejner Jidišer Arbeter Bund in Pojln un Rusland, 通称ブント)，リトワニア社会民主党(Lietuvos Socialdemokratų Partija, LSDP)等に対する態度，1903年のRSDRPへの加盟交渉決裂をめぐってルクセンブルクとヴォイナロフスカとの間に生じた対立，ヴォイナロフスカが党職を退き，インタナショナル書記局派遣員をも辞任するに至った経緯[30]等が生々しく描かれており，ルクセンブルクの民族問題観およびロシアの運動に対する態度を知るのにきわめて重要な史料となっている。

以上のほかにも，ルクセンブルクの民族問題における立場を理解するうえにはそれほど決定的に重要ではないが，多くの未公開書簡が続々と発表されている。[31]ソ連，ポーラン

29) F. Tych 編集・序文・校閲・付註, „Listy Róży Luksemburg do Cezaryny Wojnarowskiej (1896–1905), "*Z pola walki*, XIV (1971)–1, 199–239.

30) 筆者が旧稿において，このときヴォイナロフスカはSDKPiLを脱党したとした(前掲論文, 87, 脚註170)のは不正確であった。ヴォイナロフスカはたんに党職を退いただけであって，その死(1911年)まで党員としてとどまった。ここに訂正したい。

31) たとえばRosa Luxemburg他(伊藤成彦編集・序文), *Briefe an Mathilde Jacob (1913–1918)*, 東京〔極東〕1972がある。これは伝記史料としては興味あるものを含まないではないが政治問題への言及が皆無に近いため，政治史の史料としては価値が薄い。«Роза Люксембург и российское рабочее движение», *Вопросы истории КПСС*, (1971)–3, 103–112はヨギヘス＝ティシュカ宛13通，ボグダーノフ(А. Богданов)宛，ポートレソフ(А. Н. Потресов)宛，ソェトキン宛

ド，ドイツの研究者が夥しいアルヒーフ史料から引用しているところを見れば，まだまだ新しい史料の公刊が続くものと考えた方がよいであろう。伝えられるところによれば，「ロシア革命論」の出版を強く勧めたルクセンブルクのポーランドの同志宛の数通の書簡が，ワルシャワの党史研究所のアルヒーフに保存されているということである。[32] もしこれが公表されれば，ルクセンブルクは「ロシア革命論」におけるボリシェヴィキ批判をのちに撤回したという，一部においてなお有力な説は修正を迫られることになるであろう。いずれにせよ，すでに公開された書簡だけでもかなりの数にのぼり，その多くは研究者にとって入手し難い状態にある。ポーランドの一研究者が述べているように，[33] さしあたりすでに公刊されているすべての書簡をまとめて出版することが緊急の課題であろう。

IV. 伝　　記

70年代に出版された伝記のうち，もっとも規模の大きなものは，東ドイツのラシッツァとラーチュンの著わしたものであろう。[34] しかしこの伝記および東ドイツにおける研究動向については，旧稿において触れたことがあり，[35] また東ドイツの研究者は，ルクセンブルクのポーランドにおける活動にほとんど関心を示していないので，ここでは詳しく立入る必要はないと思われる。

ポーランドにおいては，長いあいだ，ルクセンブルクの伝記も年譜も出版されず，多くの研究者の嘆くところとなっていた。[36] しかしようやく1973年になって，「ポーランド伝記辞典」の一項目として，小規模ながらティフの手になる伝記が現われている。[37] ルクセ

それぞれ1通，RSDRP 第2回大会へのポーランド代表宛電報を載せているが，いずれも初公開ではなく，抜粋のしかもロシア語訳である。未見であるが，1970年以降に公開されたルクセンブルクの書簡としては，このほかに以下のものがある：F. Tych 編集，„Zwei Briefe Rosa Luxemburgs an Kurt Eisner,“ ***Internationale wissenschaftliche Korrespondenz zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung***, Berlin-West, 第15号 (1972)；„Nie opublikowane listy Róży Luksemburg w sprawie Górnego Śląska. Listy Róży Luksemburg do Juliusza Bruhnsa, grudzień 1902-kwiecień 1905（上シロンスク問題についてのローザ・ルクセンブルクの未公開書簡。ローザ・ルクセンブルクのユリウス・ブルーンス宛書簡，1902年12月—1905年4月），“ ***Ruch robotniczy na Śląsku Opolskim***（シロンスク・オポルスキ地方の労働運動），Opole, 8号 (1971).

32) これは1974年10月にケルンのシュトローベル (G. W. Strobel) を訪ねたときに得た情報。シュトローベルはワルシャワの知人を通じて秘かにこの書簡のコピーを入手しているということであるが，書簡の公表はポーランド当局によって固く禁じられているので知人に迷惑を及ぼすことを恐れて新著（前註11を見よ）においても言及を控えたということである。

33) „Spory ideologiczne ...,“ ***Z pola walki***, XIV (1971)-1, 109.

34) A. Laschitza, G. Radczun, ***Rosa Luxemburg. Ihr Wirken in der deutschen Arbeiterbewegung***, Berlin-Ost 1971.

35) 伊東，前掲論文，66-67．なおこの間に「ス・ポラ・ヴァルキ」誌に書評が現われ，東ドイツの研究者による資本蓄積論の一面的理解に対して厳しい批判がなされているのは興味深い：R. Gradowski, ***Z pola walki***, XVII (1974)-2, 349-356. 後註135を参照せよ。

36) „Spory ideologiczne ...,“ ***Z pola walki***, XIV (1971)-1, 86, 102, 107, 157-158；T. Sierocki, „Sesja naukowa w Centralnej Szkole Partyjnej w 100 rocznicę urodzin R. Luksemburg（党中央学校におけるローザ・ルクセンブルク生誕百周年記念研究集会），“ ***Z pola walki***, XIV (1971)-3, 214; W. Najdus, ***SDKPiL a SDPRR 1893-1907***（ポーランド王国・リトワニア社会民主党とロシア社会民主労働党，1893-1907年），Wrocław 他 1973, 9.

37) F. Tych, „Luksemburg (Luxemburg, Luxenburg) Rozalia (Róża),“ Instytut Historii PAN, ***Polski słownik biograficzny***, Wrocław 他 1935-, XVIII (1973), 119-129. この大伝記辞典は，戦前に出版が開始され，40年後の1975年にようやく第20巻，N の項にまで至り，Ż を頭文字と

ンブルクの書誌の編纂，未公開書簡の出版等をながらく手がけ，ポーランドの労働運動史一般の研究においても功績の大きいティフは，この小伝において，たんにルクセンブルクの伝記的事実を叙するのみではなく，一連の論争的な問題について明確な Stellungnahme を試みようとしている。辞典の一項目という性格上，いちいち典拠を示す手続きはとられていないが，この研究者の過去の業績を見れば，小伝中のすべての記述が堅実な史料と最新の研究水準を踏まえているだろうことは疑いない。この小伝にはまた従来のルクセンブルク評価の素描，史料，文献状況の概観も付されている。伝記的事実に関して興味深いのは，ティフがルクセンブルクの名前としてふつう用いられる Róża ではなく，Rozalia を第一に掲げていることである。ティフによる伝記は，小規模ながらポーランドにおけるルクセンブルク研究の集大成を示すものであり，今後の研究方向を画するものといってよいであろう。

出版予告によれば，1975 年秋には，ながいあいだティフの助手であり，研究協力者でもあったコハンスキによって，本格的なルクセンブルク伝が上梓されるということである。[38] コハンスキはすでに SDKPiL 研究において優れた業績[39]を残しており，ルクセンブルク研究を新たな水準に引き上げるものと期待される。

すでに 4 年前から準備中であると伝えられていた[40]ポーランド労働運動活動家伝記辞典第 1 巻も，いよいよ 1975 年秋に上梓されるということである。[41] これは全 6 巻の予定で刊行されるものであり，ルクセンブルクのみならずヨギヘス＝ティシュカ，マルフレフスキ (J. Marchlewski)，ヴァルスキ (A. Warszawski＝Warski)，ジェルジンスキ (F. Dzierżyński) ラーデク (K. Radek) のような著名な SDKPiL の指導者の伝記も含まれる筈である。この伝記辞典は，ポーランドの労働運動史についての知識不足がルクセンブルク研究の妨げとなっている諸外国，なかんずくわが国の研究者にとってとりわけ有用な文献となることだろう。

ソ連においては，20 年代に簡単な伝記[42]が出版されたのち，長いあいだ新しい伝記を著わそうとする努力が行なわれなかった。ようやく 1974 年に，ポーランド労働運動史専門家ヤジュボロフスカヤとドイツ労働運動史専門家エヴゼロフの手になる簡潔なルクセンブ

する最後の項目まであと何巻，何年を要するか見当もつかないという，大変息の長い企画で，ポーランド史の研究には欠かせない文献であるが，残念ながらわが国のどの図書館・大学でも購入されていないように思われる。筆者も最近の 4 巻を不完全な形で所持しているにすぎない。

38) A. Kochański, ***Róża Luksemburg***, Warszawa 1975. ***Zapowiedzi wydawnicze***, 1/7/1974 による。

39) 後註 92 を見よ。

40) A. Czubiński, „Dobry klimat dla badań nad dziejami ruchu robotniczego (労働運動史研究にとってよい環境)," ***Trybuna ludu*** (人民の論壇), 29. X. 1971, 4 および Najdus, 前掲書, 9 を見よ。

41) ***Słownik biograficzny działaczy polskiego ruchu robotniczego*** (ポーランド労働運動活動家伝記辞典), 6 巻, Warszawa, 巻 1 : A–D, 1975 〔***Zapowiedzi wydawnicze***, 49/5144/1974〕.

42) А. Ельницкий, ***Роза Люксембург. Очерк ее жизни, общественной, революционной, публицистической и научной деятельности***, Москва 1925 (筆者未見). なおやはり未見であるが 1962 年までのソ連におけるルクセンブルクの研究については簡単な書誌がある : Я. В. Зайцев, «К Вопросу об историографии жизни и деятельности Розы Люксембург», ***Ученые записки. Серия исторических наук***, Уфа, 12 号(1963), 101–115. 1960–1970 年については, В. В. Чистяков の論文 (後註 60) に付されているものが参考になる。

ルク伝が雑誌記事として現われた。[43] 著者は第2インタナショナル左派の指導者ルクセンブルクの遺産を反ソ・反共分子による悪用から守るという関心をもってこの伝記を書いており,[44] 章末毎の夥しいレーニンからの引用に著者の評価の基準がもっぱらレーニンに宿っていることを示している。かなり広汎な史料・文献を渉猟しているが，社会主義圏で刊行されたものが主で，西側史料・文献の引用は努めて避けようとしているように見える。[45] この伝記はまた，すぐれて公人としてのルクセンブルクの伝記であって，ルクセンブルクの私生活への言及がほとんどなく，たとえばヨギヘス＝ティシュカという人物がルクセンブルクにとって私的に何であったか，ということは，この伝記からは少しも明らかとなって来ない。まだ筆者の入手するところとなっていないが，出版予告によれば，1974年秋に同じ二人の著者による浩瀚なルクセンブルク伝が上梓されている筈である。[46] ソ連におけるルクセンブルク評価も，50年代と比べると大きく変ってきているだけに，ソ連最初の本格的なルクセンブルク伝に少なからざる期待が寄せられる。

V. モノグラフ

70年代に入ってから，直接あるいは間接にルクセンブルクのロシア＝ポーランドにおける活動を論じた大量のモノグラフが登場した。そのなかには数百ページに達する，しかもきわめて質の高い力作が含まれている。小論の枠内では，そのひとつひとつについて全面的な検討を加えることは到底不可能である。そこでまず主要な研究を簡単に紹介し，次章において若干の問題をとりあげ，研究動向を整理することにしたい。

1. ルクセンブルク論

まずポーランドにおいては純粋な意味での論文ではないが，ポーランドの主要な研究者の立場を知るための恰好の資料として，ルクセンブルク生誕百年記念討論会速記録[47]および研究集会報告要旨[48]が第一に言及するに価する。「ス・ポラ・ヴァルキ」誌編集部において開かれた討論会においては，ティフが司会と問題提起役を勤め，歴史学者故ジュイホフスキ (M. Żychowski)，ブワト (W. Bułat)，ヴァルデンベルク (M. Waldenberg)，コハンスキ，カンツェヴィチ (J. Kancewicz)，ソプチャク，経済学者コヴァリク (T. Kowalik)，ジェヴルスキ (J. Dziewulski)，ミェシュチャンコフスキ (M. Mieszczankowski)，哲学者ヴォイナル＝スイェツカ (J. Wojnar-Sujecka) が発言を行なっている。司会者ティフは，開会にあたって，「『ス・ポラ・ヴァルキ』誌編集部における討論集会がいつもそうであるように，今回もまた困難なテーマ，ことにポーランドにおいては労働運動の歴史過程の周知の特徴および労働運動を貫く対立のために，他のどの国にも増して争われているテーマ

43) И. С. Яжборовская, Р. Я. Евзеров, «Роза Люксембург», *Новая и новейшая история*, (1974)-5, 98-118; (1974)-6, 63-95.
44) 同論文，(1974)-5, 98; (1974)-6, 77.
45) 皮肉なことに「ロシア革命論」だけは西ドイツで出版されたものの引用を余儀なくされている：同論文，(1974)-6, 77-78.
46) Р. Я. Евзеров, И. С. Яжборовская, *Роза Люксембург. Биографический очерк*, Москва 1974 〔*Новые книги*, 50/8/1974〕.
47) „Spory ideologiczne ...," *Z pola walki*, XIV (1971)-1, 79-175.
48) T. Sierocki, „Sesja naukowa ...," *Z pola walki*, XIV (1971)-3, 206-216.

を取り上げるよう努力した」[49]と述べている。この開会の辞が示しているように，討論会はポーランドの研究者のあいだで長らくタブーとされてきた微妙な問題を大胆にとりあげ，大きな論争を喚び起している。[50] 討論における発言の共通の特徴は，研究者としての道を歩み始めたときに，多かれ少なかれスターリン主義の洗礼を受けた討論参加者が，いずれもその過去をきびしい自己批判を通じて克服しようと努めていることである。白熱した討論の過程で発言者のあいだの立場の相違が顕在化し，なかには相互の激しい攻撃にまで発展したものもある。もっとも，この討論会の雰囲気をそのままポーランドの一般的空気と受けとるならば誤りであろう。討論の一参加者が述べているように[51]ポーランドで一般に流布している見解は，この討論会の参加者が当然とみなしているものからは，なお遠いのが実情である。研究集会の方は，党中央学校において，1971年4月5日に党書記，ソ連大使館・東ドイツ大使館代表列席のもとに行なわれた。報告を行なったのは社会科学大学（旧党高級学校）学長ザスタヴヌイ (W. Zastawny)，歴史学者ソプチャク，ラドラク (B. Radlak)，ナイドゥス，ブワト，コハンスキ，経済学者ジュラヴィツキ (S. Żurawicki)，グラドフスキ (R. Gradowski)，ストリンスキ (F. Stoliński)，ザヴァツキ (J. Zawadzki)，社会学者ヤニツキ (J. Janicki) である。研究集会では前年の12月事件の影響を受けて前記討論会以上に大胆な発言が飛び出し，ルクセンブルクのレーニン批判を引用して党内民主主義を要求する者さえ現われるほどであった。[52]

前記討論会においてティフが「最近数年間にポーランドにおいてもっとも多くの新しいことを語った」[53]としている経済学者，経済史家のモノグラフを挙げれば，ジェヴルスキによるルクセンブルクの経済観の分析[54]およびルクセンブルク＝レーニン論争の経済理論的基礎の分析，[55]コヴァリクによるルクセンブルクの資本蓄積論の分析がある。[56]歴史論文としては，カンツェヴィチ，[57] グラドフスキ[58]によるルクセンブルク生誕百年記念論文，グ

49) „Spory ideologiczne ...," *Z pola walki*, XIV (1971)-1, 79.

50) この時期には一般に労働運動史専門家のあいだで，自己批判の気運が高まったようである。社会科学大学副学長チュビンスキは党機関紙記者とのインタヴューにおいて，過去の労働運動史研究が多くの単純化の誤まりを犯したこと，労働者階級の歴史と労働運動の歴史，労働運動の歴史と革命的前衛の歴史をそれぞれ同一視し，全体としてこのテーマを非歴史的，神秘主義的に扱う傾向があったことを指摘している：Czubiński, „Dobry klimat ...," *Trybuna ludu*, 29. X. 1971, 4.

51) „Spory ideologiczne ...," *Z pola walki*, XIV (1971)-1, 99 および同速記録，153 を参照せよ。

52) コハンスキの報告要旨を見よ：Sierocki, „Sesja naukowa ...," *Z pola walki*, XIV (1971)-3, 215.

53) „Spory ideologiczne ...," *Z pola walki*, XIV (1971)-1, 84, およびジェヴルスキの発言，同速記録，152 を参照せよ。

54) J. Dziewulski, *Wokół poglądów ekonomicznych Róży Luksemburg*（ローザ・ルクセングルクの経済観をめぐって），Warszawa 1972. これは未見である。グラドフスキによる批判的な書評が *Z pola walki*, XVI (1973)-4, 312-317 にある。

55) J. Dziewulski, „O teoretyczno-ekonomicznym podłożu ‚dwudziestletniego sporu' między Różą Luksemburg a Włodzimierzem Leninem w kwestii narodowej（ローザ・ルクセンブルクとウラジーミル・レーニンの民族問題における「20年間論争」の経済理論的基礎について），" *Z pola walki*, XIV (1971)-1, 33-61. 同論文において上梓が予告されている J. Dziewulski, *U źródeł poglądów ekonomicznych Róży Luksemburg*（ローザ・ルクセンブルクの経済観の源泉）は未見である。

56) T. Kowalik, *Róża Luksemburg. Teoria akumulacji i imperializmu*（ローザ・ルクセンブルク，蓄積と帝国主義の理論），Wrocław 他 1971. 残念ながらこの書も未見である。

57) J. Kancewicz, „Rosa Luxemburg—eine glühende Internationalistin," *Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung*, XIII (1971)-3, 398-412.

58) R. Gradowski, „Róża Luksemburg—teoretyk i działacz międzynarodowego ruchu robot-

ウォヴァツキによるルクセンブルクの SPD 西ポンメルン（現ポーランド領ポモジェ）組織における活動の叙述[59]を挙げることができる。哲学者のものとしては，ヴォイナル＝スイェツカによる社会意識論が言及[60]に価しよう。

ソ連では，もっぱら歴史学者が活躍している。1890年代におけるルクセンブルクの政治理念の形成を論じたヤジュボロフスカヤの論文，[61]同じくヤジュボロフスカヤのルクセンブルク植民地問題論，[62]ルクセンブルクのロシアの革命運動との関係を叙述したジェレンコーフスキー，[63]クレイン[65]の論文，国際革命運動へのルクセンブルクの貢献を論じたチスチャコーフ，[65]マヌセーヴィチ[66]の論文，ルクセンブルクのベルンシュタイン主義・ミルラン主義との闘争を叙述したザーイツェフ[67]の論稿等が言及に価する。ソ連についてはこのほかに書評，学界報告等も見逃してはならないだろう。東ドイツで刊行され始めたルクセンブルク著作集についてはイズヴォレンスカヤ[68]が，またネトルのルクセンブルク伝

---

niczego," *Z pola walki*, XIV (1971)-3, 3-24. グラドフスキはどちらかといえば前記討論会で指摘された古い立場に立っている。

59) A. Głowacki, „Róża Luksemburg i zachodniopomorska organizacja SPD przed I wojną światową（ローザ・ルクセンブルクと第一次大戦前の SPD の西ポンメルン組織)," *Z pola walki*, XIV (1971)-1, 63-77.

60) J. Wojnar-Sujecka, „Świadomość społeczna a proces historyczny w pisarstwie Róży Luksemburg（ローザ・ルクセンブルクの著作における社会意識と歴史過程)," *Studia filozoficzne*（哲学研究), XIV (1974)-3, 3-18. これの英訳として "Social Consciousness and Historical Process in Rosa Luxemburg's Writings," *Dialectics and Humanism. The Polish Philosophical Quarterly*, 1973年秋季号(創刊号), 53-66. なおルクセンブルクが資本主義自動崩壊論を唱えたとするヴォイナル＝スイェツカの見解は，ポーランドでは保守的な立場に立つものとして批判されている。前記討論会におけるコヴァリクの発言を見よ：„Spory ideologiczne ...," *Z pola walki*, XIV (1971)-1, 136-137. 哲学者のルクセンブルク論としては，ポーランドでは M. Szlezinger, „Podstawy filozoficzne doktryny społecznej Róży Luksemburg（ローザ・ルクセンブルクの社会理論の哲学的基礎)," *Studia socjologiczno-polityczne*（政治社会研究), 15号 (1963)（筆者未見）が高く評価されている。S. Dziamski, *Zarys polskiej filozoficznej myśli marksistowskiej 1878-1939*（ポーランド・マルクス主義哲学思想概説。1878-1939年), Warszawa 1973, 14を見よ。

61) И. С. Яжборовская, «*Справа роботнича* і формирование идейно-политических позиций Розы Люксембург», *Советское славяноведение*, VII (1971)-2, 12-20.

62) 同, «Роза Люксембург и колониальный вопрос», *Народы Азии и Африки*, (1971)-2, 54-63.

63) Г. М. Деренковский, «Роза Люксембург в Петербурге и Куоккала, 1906 г.», *Вопросы истории*, (1973)-3, 130-137.

64) Б. С. Клейн, «*Дело* Розы Люксембург», *Вопросы Истории КПСС*, (1971)-3, 122-126. これはルクセンブルクに関するロシア警察の史料を発掘したもの。

65) В. В. Чистяков, «Роза Люксембург и международное рабочее движение», *Вопросы истории*, (1971)-3, 65-80. この論文には60年代のソ連のルクセンブルク研究の簡単な書誌が付されている：同論文，65-66.

66) А. Я. Манусевич, «Роза Люксембург и ее место в истории международного рабочего движения», *Новая и новейшая история*, (1971)-2, 18-37. この論文は，すでに旧稿（伊東，前掲論文，97-68）において紹介した。

67) Я. В. Зайцев, «Борьба Розы Люксембург против бернштейнианства и мильеранизма, 1898-1904», *Ученые записки Башкирского Государственного Университета. Серия исторических наук*, 10号 (1970), 47-109（筆者未見）.

68) Н. Изволенская, «Новое издание трудов Розы Люксембург», *Коммунист*, (1971)-4, 124-127.

についてはヤジュボロフスカヤ[69]とアーイジン[70]がそれぞれ書評を行なっている。1973年にイタリアのレジオ・エミーリア (Reggio Emilia) で開かれたルクセンブルク研究国際会議については，ボゴラートが報告している。[71]

ウクライナの歴史学者クンデュバ[72]とクリニチ[73]もまたルクセンブルク生誕百年を記念して，それぞれポーランドとドイツにおけるルクセンブルクの活動についての論文を発表している。しかし両論文は主として50年代の史料に依拠してきわめて通俗的な結論を導き出しており，百周年記念に間に合わせるために急遽書かれたという感を与える。ソ連の地方学界の低調ぶりを示しているといえよう。

東ドイツにおいては関心がもっぱらドイツに集中しており，[74] ルクセンブルクのポーランドにおける活動については，前記のカンツェヴィチ[75]の記念論文が訳載されているのみである。

さいごにわが国における研究を一瞥すれば，丸山敬一氏によるルクセンブルクのトルコ問題とポーランド問題における立場の分析二点[76]および同氏によるルクセンブルクの民族問題論の翻訳に付された解題，[77] 肥前栄一氏によるルクセンブルクの博士論文「ポーラン

69) И. С. Яжборовская, «Роза Люксембург и противники Ленинизма. Критический обзор», *Рабочий класс и современный мир*, (1971)-1, 172-173 (筆者未見).

70) Б. А. Айзин, «Проблемы рабочего движения и современныи антикоммунизм», *Новая и новейшая история*, (1974)-4, 184-195.

71) В. А. Богорад, «О теоретическом наследии Розы Люксембург. Обзор международной научной конференции», *Рабочий класс и современный мир*, (1974)-2 (未見). レジオ・エミーリアにおける国際会議についてはヤジュボロフスカヤ，エヴゼロフも言及している：Яжборовская, Евзеров, «Роза Люксенбург», *Новая и новейшая история*, (1974)-5, 98. 日本からの参加者の報告としては，伊藤成彦，『新しい社会主義像への模索——"ローザ・ルクセンブルク研究国際会議"から——』，「思想」，(1973)-12, 151-199；西川正雄，『ローザ・ルクセンブルクとアジエンデ——マルクス主義研究国際週間に出席して——』，「朝日新聞」，19. X. 1973 (夕刊) がある。なお西ドイツにおいて，この会議の報告集が刊行されている：C. Pozzoli 編集, *Rosa Luxemburg oder die Bestimmung des Sozialismus*, Frankfurt a. M. 1974 (未見).

72) І. Д. Кундюба, «Роза Люксембург і польський робітничий рух (ローザ・ルクセンブルクとポーランド労働運動)», *Український історичний журнал* (ウクライナ歴史雑誌), (1971)-2, 36-43.

73) І. М. Кулинич, «Роза Люксембург і революційний рух у Німеччині (ローザ・ルクセンブルクとドイツの革命運動)», *Український історичний журнал*, (1971)-2, 28-35.

74) A. Laschitza, „Rosa Luxemburg und Karl Liebknecht über das Verhältnis von Demokratie und Sozialismus. Zur Sozialismus-Auffassung der deutschen Linken," *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, XIX (1971)-7, 861-890; A. Laschitza, G. Radczun, „Zum Wirken Rosa Luxemburgs in der deutschen Arbeiterbewegung in den Jahren der ersten Revolution in Rußland," *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, XIX (1971)-4, 510-538; 同, „Zum Wirken Rosa Luxemburgs in der revolutionären deutschen Arbeiterbewegung," *Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung*, XIII (1971)-2, 179-197.

75) 前註57を見よ。

76) 『ローザ・ルクセンブルクと民族問題——トルコ問題を中心として』，「大阪市立大学法学雑誌」，XIX (1972)-2, 164-183；『ローザ・ルクセンブルクとポーランド問題——ローザ民族理論の問題点』，「大阪市立大学法学雑誌」，XXI (1974)-1, 41-82.

77) 「マルクス主義と民族問題」，231-237. 丸山敬一氏の諸論文はいずれもルクセンブルクのドイツ語論文あるいはドイツ語に翻訳されたものを基礎としている。非常に手際よく諸論点が整理されているが，史料的基礎が狭いこと，ルクセンブルクの民族問題における立場をもっぱら革命政党の戦術としての有効性という観点から評価していることが弱点となっているように思われる。

ドの産業的発展」の翻訳に付された解題,[78] 木村真樹男氏のルクセンブルクと「ポーランド問題」に関する報告,[79] 富永幸生氏によるルクセンブルクの「ロシア革命論」に関する研究,[80] 酒井角三郎，滝田修，清水多吉，向山景一，川田洋，浜田泰三，南成四の諸氏によるルクセンブルク論集,[81] 山口正之氏によるルクセンブルク資本蓄積論批判,[82] 松岡利道氏によるルクセンブルク帝国主義論,[83] 伊藤成彦氏による日本におけるルクセンブルク受容の歴史概観[84] 等が挙げられよう。

2. SDKPiL 論

70年代においてルクセンブルク研究の画期的な境地が拓かれたのは，ルクセンブルクその人に直接かかわる問題についてというよりも，むしろルクセンブルクの参加したポーランドの社会主義運動の一般的な枠組についてであった。なかんずく SDKPiL のイデオロギーと運動の実態について，従来の水準を遙かに凌駕する研究が各国において続々と現われている。

ポーランドにおいては，すでに60年代末までに基礎的な研究の堅実な蓄積がなされており,[85] 70年代前半はその成果が大きなモノグラフの刊行となって結実した時期といえよう。

第一に言及すべきものは，ナイドゥスの SDKPiL と RSDRP の関係史[86] であろう。ナ

78) 『解説——ポーランド・ナショナリズム論争ノート』，「ポーランドの産業的発展」，東京〔未来社〕1970, 199-236. 主として *Die Neue Zeit* 誌上の論争とレーニンの著作をフォローしただけでカウツキーとルクセンブルクの対立は「レーニンによって基本的に止揚された」(同書, 229) とするような大雑把な議論には賛成しがたい。氏の提起している問題の本質についてはカレツキ (M. Kalecki), ザヴァツキ，ジェヴルスキ，コヴァリク等の研究成果が示唆を与えると思われる。

79) 「ローザ・ルクセンブルクと『ポーランド問題』」，1974年5月19日に大阪大学で開かれた日本西洋史学会第24回大会現代部会における報告。残念なことに筆者はこの大会に出席することができなかった。氏の報告が何らかの形で公刊されたかどうか不明である。

80) 『ローザ・ルクセンブルクのロシア革命論をめぐって(1)』，「青山法学論集」，XVI (1974)-1, 31-69. 同論文はドイツの社会主義者にとってロシアのボリシェヴィキがいかなる意味をもったかの解明を課題としている。しかしルクセンブルクをこのような問題関連においてとりあげるのは必ずしも適当ではないように思われる。けだしルクセンブルクは同時代のドイツの社会主義者の典型ではなく，そのボリシェヴィキ批判があのような激しさを帯びたのも多分にこの革命家の特殊ポーランド的背景に由来すると考えられるからである。第一部は後日談を取扱っているのみなので今後に期待が寄せられる。

81) 「ローザ・ルクセンブルク論集」，東京 (情況社) 1970. ここに収められている論文は向山氏の一論文を除いてすべて1970年以前に雑誌に発表されたものである。示唆するものも少なくないが，史料的基礎の狭さに加えてルクセンブルクを自分の問題関心にひきつけようという性急さが共通の弱点となっている。ルクセングルクのポーランドにおける活動に注意を払い，かつ多少とも学問的に言及に価するのは滝田修(竹本信弘) 氏の論文 (同書, 11-56, 74-98, 261-312) くらいであろう。

82) 『ローザ・ルクセンブルクの自動崩壊論批判』，「経済」，(1970)-4, 230-250. 前註60で示したように今日のポーランドでは，ルクセンブルクが自動崩壊論を唱えたとする説は俗説として厳しく批判されている。

83) 松岡利道，『ローザ・ルクセンブルクの帝国主義論——その生成史的考察』，「龍谷大学経済論集」，XIII (1974)-4, 36-63.

84) 伊藤成彦，『日本社会主義運動とローザ・ルクセンブルク』，「思想」，(1971)-10, 39-55.

85) ラドラクによる研究成果の概観を見よ：B. Radlak, „Stan badań nad dziejami SDKPiL," *Z pola walki*, XII (1969)-1, 25-84. 同論文には脚註として詳細極まりない書誌が付されている。ルクセンブルクに直接かかわるものは69-77にある。

86) W. Najdus, 前掲書. なお最近ラドラクによる書評 *Z pola walki*, XVII (1974)-2, 383-387 が現われている。ラドラクは理論面が弱いと指摘している。

イドゥスの叙述は，堅実な史料的基礎と均衡のとれた評価によって優れている。[87] ナイドゥスの研究はさしあたり1893年から1907年までしかカヴァーしていないが，序文によれば，[88] 規模が大きくなりすぎたので2巻に分けたということである。まもなく1908–18年を扱った第2巻が刊行されるものと期待される。1883–93年におけるロシアとポーランドの社会民主主義運動の関係は，すでに他の研究者によって手がけられている。[89] もしナイドウスの研究の第2巻が刊行されれば，全期間がカバーされることになり，ロシアの運動におけるポーランドの社会民主主義者，なかんずくルクセンブルクとその同志たちの役割の全容が明らかとなることだろう。

つぎに，SDKPiL の研究について一瞥するならば，ティフによる SDKP の前身の一つ「ポーランド労働者同盟 (Polski Związek Robotniczy, PZR)」の歴史[90]，ラドラクによる SDKPiL 再建過程（1899–1901 年）の叙述，[91] 1907–1910 年の SDKPiL の政治的・イデオロギー的問題を論じたコハンスキの浩瀚な博士論文[92]等を挙げることができよう。本稿の問題関連においてもっとも注目に価するのは，コハンスキの研究である。コハンスキは，ルクセンブルクの論文「民族問題と自治」の成立の背景と内容を詳しく分析し，SDKPiL 全体のイデオロギーのなかに位置づけている。[93] ポーランドにおいては，近い将来に，ラドラクとソプチャクによって SDKPiL の通史が編纂されるということである。[94] もしこのような通史が刊行されるならば，ルクセンブルクをポーランドの社会民主主義運動のなかに位置づけることは一層容易となるであろう。

SDKPiL 研究と関連して見逃すことができないのは，この党の他の指導者についての研究である。ポーランドにおいては，近年とみにマルフレフスキに対する関心が高まっている。すでに書誌的研究はほぼ終了し，[95] 著作集や書簡集が次々と刊行されている。[96] マルフ

87) この点についてソ連の歴史学者との間に対立があるようにみえるのは興味深い。ナイドゥスは，史料の取扱いが誤っているとしてソ連の史家エルモラエヴァ，マヌセーヴィチを批判している：同書，94–95, 102, 121, 343. および後註107を参照のこと。また研究し尽されているようにみえるソ連共産党史についても，たとえばメンシェヴィキ，エス・エル，レーニンが編集陣を離れてのちの「イスクラ」誌等の研究が欠落していると指摘している：同書，10.

88) 同書，10.

89) Z. Łukawski, ***Polacy w rosyjskim ruchu socjaldemokratycznym w latach 1883–1893*** (ロシアの社会民主主義運動におけるポーランド人，1883–1893年), Kraków 1970 (筆者未見).

90) F. Tych, ***Polski Związek Robotniczy 1889–1892***, Warszawa 1974.

91) B. Radlak, „Odbudowa i działalność SDKPiL w latach 1899–1901 (ポーランド王国・リトワニア社会民主党の再建と活動，1899–1901年)," ***Z pola walki***, XIV (1971)-2, 3–26. シュトローベルは，この研究は事実を単純化しているとして批判している：Strobel, 前掲書，123, 脚註1.

92) A. Kochański, ***SDKPiL w latach 1907–1910. Problemy polityczne i ideologiczne*** (1907–1910年のポーランド王国・リトワニア社会民主党。政治的・イデオロギー的諸問題), Warszawa 1971. コハンスキはこの労作の副産物として同時に次の論文を発表している：„Działalność organizacyjna Zarządu Głównego SDKPiL w latach 1907–1910 (ポーランド王国・リトワニア社会民主党の中央幹部会の組織活動，1907–1910年), " ***Z pola walki***, XIV (1971)-3, 119–133.

93) 前掲書，218–258.

94) Radlak, „Odbudowa i działalność ...," ***Z pola walki***, XIV (1971)-2, 3 を見よ。

95) J. Kaczanowska, ***Bibliografia prac Juliana Marchlewskiego***, (ユリアン・マルフレフスキ著作書誌), Łódź 1954 (未見)；M. H. Черных, «Новые данные к библиографии трудов Ю. Мархлевского», ***Советское славяноведение***, (1966)-4, 92–96; H. Schumacher, „Uzupełnienia do bibliografii prac Juliana Marchlewskiego (ユリアン・マルフレフスキ著作書誌補遺),"

レフスキについての質の高いモノグラフも現われ始めている。[97] このようにして SDKPiL の指導的な人物についての研究が進むならば，ネトルがそのルクセンブルク伝において「同輩者集団 (peer group)」[98]と性格づけたあの世界の輪郭が次第に明らかとなってくるであろう。

以上のようなモノグラフ研究の成果に依拠した通史あるいは政治社会学的な状況分析も70年代に入って現われている。代表的なものを挙げれば「労働運動史概説」,[99] ジャムスキによるマルクス主義思想史,[100] 著名な政治社会学者ヴィヤトルによる民族・国家意識論[101]等がある。しかし今のところ，研究の総合という側面では画期的な業績は出ていないといってよいであろう。残念ながらヴァリツキ編集の社会哲学史第1巻[102]は1860年代で，亡命史家チョウコシュ夫妻[103]による社会主義運動史第2巻は1870年代で終っている。

眼をソ連に転ずれば，ここにおいてもまたこの数年間に大量の SDKPiL 研究が現われている。もっとも注目に価するのは，ヤジュボロフスカヤによるポーランドの革命運動のイデオロギー的成長に関する研究[104]であろう。ヤジュボロフスカヤは，ポーランドの同僚の研究成果を大幅にとり入れることによってそれまでしばしば単純化・一面性を批判されてきたソ連史学[105]の水準を大きく引き上げている。しかし後述するように，この画期的な

Julian Marchlewski, Materiały sesji naukowej z okazji 100 rocznicy urodzin (ユリアン・マルフレフスキ生誕百年記念研究集会資料), Warszawa 1968, 251-265; N. Michta, „Uzupełnienia do bibliografii prac Juliana Marchlewskiego (ユリアン・マルフレフスキ著作書誌補遺)," *Z pola walki*, XIII (1970)-3, 136-138.

96) М. Н. Черных, «Письма Мархлевского к Н. М. Архангельскому», В. А. Дьяков, И. С. Миллер, А. М. Орехов 編集, *Исследования по истории польского общественного движения XIX в.—начала XX в. Сборник статей и материалов*, Москва 1971; J. Marchlewski, *Ludzie, czasy, idee* (人間，時代，理念), Warszawa, 1973. 史料案内として E. Sajdak-Michnowska, „O nowo odnalezionych listach Juliana Marchlewskiego (新しく発見されたユリアン・マルフレフスキの書簡について)," *Z pola walki*, XVI (1973)-2/3, 291-298. すでに出版が予告されているものとして，J. Marchlewski, *Korespondencja z zoną i córką* (妻・娘との往復書簡), Z. Marchlewska と B. Wróblewska による校閲，J. Durko による序文, Warszawa 1975 〔*Zapowiedzi wydawnicze*, 49/5141/1974〕がある。

97) Marchlewski, *Ludzie, czasy, idee*, に付された序文，N. Michta, „Słowo o Julianie Marchlewskim (ユリアン・マルフレフスキについての辞)," 同書，5-77; B. Wróblewska, „Sprawy polskie w niemieckiej publicystyce Juliana Marchlewskiego (ユリアン・マルフレフスキのドイツ語による評論活動におけるポーランドの諸問題)," *Z pola walki*, XIII (1970)-3, 3-21. このほかに未見であるが N. Michta, *Julian Marchlewski, Polska, naród, socjalizm* (ユリアン・マルフレスキ，ポーランド，民族，社会主義), Warszawa 1973 がある。なおわが国においても最近マルフレフスキについてのドイツ語史料を用いた研究が現われている：大月誠，『資料：ポーランド・マルクス主義と農業問題——マルフレスキを中心に』，「季刊社会思想」, II (1972)-2, 125-144.

98) Nettl, 前掲書，22-24, 267-269, 邦訳，I, 38-40, 284-285.

99) *Historia polskiego ruchu robotniczego. Zarys*, Warszawa 1974.

100) Dziamski, 前掲書.

101) J. Wiatr, *Naród i panstwo* (民族と国家), Warszawa 1974.

102) A. Walicki 編集, *Polska filozofia społeczna*, Warszawa, 巻1, 1974.

103) L. Ciołkosz, A. Ciołkosz, *Historia ruchu socjalistycznego w Polsce*, London, 巻1, 1966; 巻2, 1972.

104) И. С. Яжборовская, *Идейное развитие польского революционного рабочего движения. Конец XIX—первая четверть XX в.*, Москва 1973.

105) たとえばポーランドのコハンスキは A. Г. Шевелев, *братское сотрудничество польских социал-демократов с большевиками в 1903-1910 гг.*, Киев 1966 をこうした理由で批判している。Kochański, *SDKPiL* ..., 10, 218.

研究もなお多くの問題を残しているといわなければならない。ソ連の研究者は，レーニンあるいはロシアの革命運動の影響がすでに1917年以前にいかに強くポーランドの地に浸透し，普及していたかを確認することに特別の関心を示している。レーニンとポーランド，[106] レーニンとポーランドの労働運動，[107] レーニンとポーランド社会民主党，[108] レーニンとポーランド・プロレタリアートの革命闘争の課題，[109] ロシアの社会民主主義とポーランドの革命家，[110] ボリシェヴィキ党と SDKPiL との協力，[111] 等といったタイトルをもった研究書・論文が次々と著わされている。すべての場合にこのようなテーゼが説得的に証明できるかどうかは，はなはだ疑わしいといわなければならない。しかしこれを証明しようとする努力が，おのずから研究の発展に一定の寄与をなすだろうことは疑いない。ソ連の研究者が，ポーランドの革命家のなかでもひときわ声高にロシアの革命運動との連帯を主張したルクセンブルクに関心をもつ理由はここにあり，またわれわれがソ連における研究から一定の成果を期待する理由もここにある。

西ドイツにおいてもまた画期的な研究が現われた。ポーランドとロシアとドイツの社会民主党の相互関係を論じた西ドイツの歴史家シュトローベルの教授資格論文[112]がそれである。シュトローベルの研究は，基本的に SDKPiL 論といってよいであろう。シュトローベルは，西側の研究者として入手し得る限りの史料を駆使して，[113] 1870年代における最

106) А. И. Манусевич, И. С. Миллер, Т. Ф. Федосова 編集, *Ленин и Польша. Проблемы, контакты, отклики*, Москва 1970.

107) Р. А. Ермолаева, А. Я. Манусевич, *Ленин и польское рабочее движение*, Москва 1971. この書はナイドゥスによって批判されているものである。前註87を見よ。この書はしかしまた国内の同僚からも批判されている。Яжборовская, *Идейное развитие* ..., 66, 284 を見よ。

108) А. Я. Манусевич, „Lenin a polska socjaldemokracja w latach 1912–1914（レーニンとポーランド社会民主党1912–1914年），" *Z pola walki*, XIII (1970)-1, 29–60.

109) 出版予告が出されているもの：И. Л. Петрович, *В. И. Ленин о задачах революционной борьбы пролетариата Польши*, Минск 1974〔*Новые книги*, 1/44/1973〕.

110) 出版予告が出されているもの：А. М. Орехов, *Социал-демократическое движение в России и польские революционеры, 1887–1893 гг.*, Москва 1974〔Наука 社出版カタログ, 74/1/1974〕.

111) С. М. Фалькович, „Współdziałanie SDKPiL z partią bolszewicką podczas kampani ubezpieczeniowej lat 1913–1914 (1913–1914年の〔社会〕保険闘争期における SDKPiL とボリシェヴィキとの協力)," *Z pola walki*, XVI (1973)-2/3, 81–104. なお同著者によるモノグラフの上梓が予告されている：*Пролетариат России и Польши в совместной революционной борьбе 1907–1912*, Москва 1975〔日ソ図書カタログ, 95/8/1974〕.

112) G. W. Strobel, 前掲書.

113) 当然のことながらシュトローベルの利用しているのは主として西側のアルヒーフ史料である。アムステルダム，スタンフォード，ニューヨーク，キール，ボン等の文書館の史料は東側の研究者によってほとんど利用されていないだけに大きな価値をもつ。シュトローベルがイーディッシュ語やリトワニア語の史料をも丹念にフォローしているのには脱帽の他ない。ネトルの場合と異ってシュトローベルは，東側のアルヒーフ史料の利用を許されなかった。シュトローベルはたんにアルヒーフ史料の利用を許されなかったばかりでなく，入国そのものも拒否されているということである。筆者が直接聞いたところによれば，シュトローベルは今日のソ連領リヴォフ（Львов）でドイツ人を父，ポーランド人を母として生まれ，ポーランドの都市ウッチ（Łódź）で育ち，戦争直後に，他のドイツ系住民とともにポーランドを追放され，それ以来一度もポーランドに入国していないということである。しかしシュトローベルは共産圏諸国の研究者と個人的なコンタクトをもっており，これを通じてワルシャワの党史研究所文書館，ルブリン（Lublin）のカトリック大学の図書館，モスクワの国立中央文書館の若干のアルヒーフ史料を入手している。

初の社会主義サークルの成立から，1918年に SDKPiL がポーランド共産主義労働者党 (Komunistyczna Partia Robotnicza Polski, KPRP) に発展的に解消するまでの歴史を詳細にたどっている。疑いもなくこの書は，それがとり扱っている問題の大きさにおいても，またそれが依拠している史料の豊富さにおいても断然従来の水準を抜くものであり，現在のところこれに比肩できるものは，西側諸国においてはもちろんのこと，ソ連・ポーランドにおいても見あたらないと言ってよい。もしネトルのルクセンブルク伝がそれまで闇に包まれていたルクセンブルクの東方世界に最初に光をあてたとすれば，シュトローベルは精度の高い測量機械を携えてこの世界を探索し，詳細なる地図を作りあげたといってよいであろう。

シュトローベルは独自の立場からポーランド史学を批判している。その批判は，ポーランド史学の成果を客観的に評価するうえに有益であると思われるので，ここに簡単に紹介してみよう。

シュトローベルは，ポーランドにおける SDKPiL 研究の傾向として次の8点を挙げている：1) ポーランドの社会民主主義運動におけるユダヤ人の役割について沈黙もしくはこれを軽視，2) ロシア領ポーランドのドイツ人が SDKPiL の発展にとってもった意義と役割を軽視し，これらのドイツ人の党活動における献身と信頼性を曖昧化，3) ポーランドの社会的民族的解放にとっての SDKPiL の意義を強調，SDKPiL をポーランド民族国家の再建に関心をもち，たとえば祖国のような理念をいつも尊重した党として提示，4) 党の国内本部と在外本部とのあいだの，とくに両機関の代表者ジェルジンスキとヨギヘス＝ティシュカのあいだの意見の相違について沈黙，5) 党の指導的グループ内部での民族問題における意見の相違を，この問題におけるルクセンブルクとマルフレフスキの対立を隠蔽あるいは平板化することによって無視，6) ロシア民族，その個々の層あるいは RSDRP とその政治的意義・態度についての蔑視的ととれるすべての発言を隠蔽，7) RSDRP 内における SDKPiL とメンシェヴィキとの関係について沈黙し，同時にレーニンおよびボリシェヴィキとの関係を強調，8) SDKPiL の政治的戦術的構想に対するメンシェヴィキの影響について沈黙。シュトローベルはこれを要約して「(ポーランドの歴史家は) SDKPiL を民族的志向をもつ，ユダヤ的，とくにドイツ的影響からほとんど免れている，レーニンのボリシェヴィキと密接に結ばれた，最高指導部に私的公的争いがまったくない党のように見せかけようとしている。このような歴史像は，思った以上に歴史的現実から遠い」と述べている。[114]

たしかにシュトローベルの批判の多くは正鵠を得ている。しかしこのような傾向は，近年次第に克服されつつあるように思われる。とくに第3—5点はほぼ克服され，[115] 第6点についても，たとえばロシアの党内論争についてヨギヘス宛書簡集に現われる tatarsko-

114) 前掲書，8-9.

115) 第3点については本稿163-166頁を見よ。第4点については，コハンスキがヨギヘス＝ティシュカの独裁傾向とそれに対する党内の批判に詳しく言及しているのを見よ：Kochański, „Działalność organizacyjna ...," XIV (1971)-3, 123-133. 第5点については，ナイドゥスが1901年から1904年にかけての党内対立とくに国内組織と在外組織の対立，ルクセンブルク，ヨギヘス＝ティシュカ，ヴァルスキ対ヴォイナロフスカ，オルシェフスキ (W. Olszewski) の対立等を詳細に描き出しているのを見よ：Najdus, 前掲書，109-166.

mongolska dziczyna (蒙古タタール的野蛮) のような表現を削除せずに公表[116]したことから明らかなように，それほど目立った欠陥ではなくなってきている。それ以外の諸点については，シュトローベルの指摘は，今日もなお多かれ少なかれあたっているといえよう。[117] しかしシュトローベルによる以上のような傾向の指摘は，それ自体ひとつの問題を含んでおり，逆の傾向に走ることもまた戒められなければならないであろう。

わが国においては，加藤一夫氏のポーランド解放運動通史[118]が言及に価する。しかしSDKPiL 自体の本格的な研究はまだなされていないといってよいであろう。このような欠落がわが国におけるルクセンブルク研究の貧困の一因となっているように思われる。

VI. 研 究 動 向

1. 国際社会主義運動におけるルクセンブルクの位置

ルクセンブルクが東に属するか西に属するか，という問題は，すでに久しく論じられてきた。70年代に現われた新しい研究も，やはりこの問題に答えようと努力している。

まずソ連の研究者の見解を概観してみよう。ヤジュボロフスカヤは，その近著において次のように述べている：「ポーランドの革命的労働運動は，十分長いあいだ基本的にポーランド王国において発展したので，そのもっとも重要なイデオロギー形成期に事実上全ロシア的革命過程の構成部分であった。ポーランドの革命運動，なかんずく社会民主主義運動のイデオロギー的成長は，相当程度レーニン主義の好ましい影響のもとで進行した。」[119] このようにヤジュボロフスカヤは，ポーランドの社会民主主義運動を当初からロシアの革命運動の一構成部分と見做している。もちろんこれは，ポーランドになんらかの特殊な発展があったことを否認するものではない。しかしそのような発展があった限りでは，それは「誤謬」に導くものであった。レーニンの指摘したルクセンブルクの一連の「誤謬」がすなわちそれである。しかしヤジュボロフスカヤは，ポーランドの社会民主主義者は「レーニンの影響のもとで」絶えずこのような誤謬を訂正していったと見る。「イデオロギー的成長」とは，とりもなおさずこのようなレーニンの理念の摂取のプロセスであった。

ヤジュボロフスカヤは，たとえば，レーニンとポーランドの社会民主主義者のあいだのもっとも根本的な対立の一つをなしていた民族問題における立場に関しても，このようなプロセスを確認し得るとしている：「ローザ・ルクセンブルク(ユニウス)とカール・ラーデクの立場の対立の原因は，ルクセンブルクにおける民族・植民地問題観の進展 (эволюция) であった。このような進展は，1915年4月にレーニンの諸著作の明白な影響のもとで書かれた『ドイツ社会民主党の危機』という著作においてはっきりと確認することができる。

116) 1909年8月10日付ヨギヘス＝ティシュカ宛書簡：*Listy* ..., III, 46.

117) シュトローベルの論述はつねにきわめて，そしてしばしば過度にポレミカルである。批判の鉾先はけっしてポーランドの研究者に対してだけ向けられているわけではないが，そのポーランド史学批判はドイツ人とポーランド人の民族的な対立と結びついて特別の比重を帯びるものとなっている。シュトローベルの編集した *Quellen zur Geschichte des Kommunismus in Polen*, Köln 1967 がこの方面の研究に大きな貢献をなすものであったにもかかわらず，ポーランドにおいて顕著な沈黙でもって迎えられているのは特徴的である。おそらく新著についてもポーランド側から詳細なコメントがなされる可能性は少ないものと思われる。

118) 『ポーランド解放闘争史(上)』，「社会運動史」，3号 (1974), 47–89.

119) Яжборовская, *Идейное развитие* ..., 5–6.

……かのじょは，レーニンの教えるところに従って，民族自決権の要求をプロタリアートの利益と結びつけたのである。」[120]

このような主張にはかなり無理があると言わなければなるまい。第1に，ルクセンブルクが，レーニンの著作の直接の影響のもとに，「ドイツ社会民主党の危機」においてNationの自決権に言及したというテーゼは，証明困難であろう。[121]第2に，たとえそうだとしても，ルクセンブルクがこの著作においてNationの自決権に言及したのは，国家における人民の自決権という意味においてであって，民族性を共通にする人間集団の自決権というレーニン的な意味においてではない。[122]第3に，もし1915年の時点でルクセンブルクの民族問題観になんらかの進展があったとすれば，1918年の「ロシア革命論」にも当然それが現われてよい筈であるが，周知のように「ロシア革命論」においては以前とまったく同じ立場がとられている[123]。第4に，ヤジュボロフスカヤは，レーニンの教義が部分的ではあれポーランドの社会主義者のあいだに浸透していったことを証明せんがために，レーニンに歩み寄ったルクセンブルクとこれを拒んだラーデクとを対立させているが，実際には両者は基本的に全く同じ立場に立っていたのであって，両者を対立させることは困難である。この点では，SDKPiLの指導者は一人の例外もなく同じ立場に立っていた。SDKPiLの指導者のなかで，のちに真先にレーニンに歩み寄ったのは，ほかならぬラーデクであった。[124]

この例に即しても明らかなように，ヤジュボロフスカヤのテーゼは，なお十分説得的な裏付けを欠いているように思われる。

西ドイツのシュトローベルは，ヤジュボロフスカヤと対照的な立場から出発している。シュトローベルの力作が課題としているところは，次の一文に簡潔に表明されている：「拙著は，SDKPiLを，西方の社会民主主義とSDKPiLが『ヨーロッパ化』せんと企てたロシアの社会民主主義とのあいだの仲介者という，自ら選びとった役割において把握し，それによってSDKPiLがロシア社会民主労働党内で果そうと求めた特殊な役割を指摘し，西ヨーロッパ，とくにドイツの影響の東ヨーロッパへの伝達から生じたその精神史的意義を提示せんとするものである。[125]」このようにシュトローベルは，ヤジュボロフスカヤが東方からのインスピレーションによって次第に西方の影響から脱していったことにSDKPiLの「成長」を見ているのと対照的に，西方の影響を東方に伝達しようとしたことにその意義を見出している。

シュトローベルが，ポーランドの社会主義運動におけるドイツ人の役割を強調する理由

120) 同書，297–298.

121) ヤジュボロフスカヤは典拠を示していない。

122) この点はすでに筆者が旧稿において明らかにしておいた。伊東，前掲論文，79–81を参照せよ。同様の概念の混乱は，「ス・ポラ・ヴァルキ」誌編集部主催の前記討論会におけるジュイホフスキの発言にも見られる。ジュイホフスキは，あたかも自分の手柄のように，ルクセンブルクが「ドイツ社会民主党の危機」において肯定的に民族自決権に言及していることを指摘している：„Spory ideologiczne ...," *Z pola walki*, XVI (1971)-1, 88.

123) ティフはこれを指摘して，ジュイホフスキを批判している：„Spory ideologiczne ...," *Z pola walki*, XIV (1971)-1, 170. なおヤジュボロフスカヤは「ロシア革命論」に言及していない。

124) この点については，伊東，前掲論文，61，90（脚註186）を参照せよ。

125) Strobel, *Die Partei Rosa Luxemburgs* ..., 4.

もここに存する。ロシア領ポーランドにおけるドイツ人は，その圧倒的多数が労働者であった。ポーランドの社会主義運動の黎明期において貴族出身のポーランド系の活動家がロシアの革命理念に影響され易かったのに対し，労働者出身のドイツ系の活動家はこの影響を退け，ポーランドの社会主義運動を西ヨーロッパ的な発展軌道に繋留するのに貢献した。[126] シュトローベルはまた，SDKPiL の指導者がロシアの同志に対してより進んだ西欧を代表する者として奇妙な長子意識，政治的優越意識をもったことを指摘し，[127] これを「社会的ショーヴィニズム」と呼んでいる。[128]

しかし他方において，SDKPiL のメンバーがロシア革命に積極的に参加し，ボリシェヴィキの指導権を認めるに至ったことも周知の事実である。シュトローベルはこれを次のように説明している：「ポーランド人は，長年追求してきたロシアの党の『ヨーロッパ化』あるいはロシア革命の人間化を達成することに成功しなかった。ロシア革命の『アジア的状態』〔マルフレフスキの表現—伊東〕は，かくして，ロシアの党の敗北であったばかりではなく，また全ロシア党のなかにあってロシアの党に対するプロレタリア的使命意識を貫徹し得なかった『ヨーロッパ的な』ポーランドの党の——かれら自身によっては認識されなかったが——敗北でもあった。」[129] ここにおいてわれわれは，シュトローベルが，ヤジュボロフスカヤと正反対の方向から出発しているにも拘わらず，奇妙にも同じ結論に到達していることを見出す。すなわち SDKPiL は，東西の中間にあって，幾多の逡巡と曲折を含む 25 年間の遍歴ののち，結局東方に救済——あるいは敗北——を見出すに至るという歴史である。

ポーランドの研究者はまた独自の見地をもっている。ポーランドの歴史家は，ポーランドが，たとえ一時期部分的にロシアによって支配されたことがあったとしても，基本的に西ヨーロッパに属するということを自明のことと見做している。このような観点からは，ロシア領ポーランドにおいて，帝国の他の部分とは異った特殊な状況，特殊な発展があった[130]としても，それはきわめて自然であった。SDKPiL の指導者がボリシェヴィキに近い立場をとったにせよ，あるいはこれと対立する立場をとったにせよ，いずれも自身の活動の論理を優先させた結果であった。ナイドゥスは次のように述べている：「ロシア社会民主労働党の個々の分派の SDKPiL に対する影響についてあまりに行き過ぎた結論を導き出すことには，非常に慎重でなければならない。ことに影響関係がたんに一方向においてのみ看取される場合にはそうである。SDKPiL の指導者は，たとえ近い政治的立場に立ち，連帯によって結ばれた活動家の提起したものであろうとも，外国の提議や指示を受動的に受け取る人々ではけっしてなかった。かれらはまた自身の状況評価や方針に対する支持を他の誰からよりもまず全国家党内の自分の同盟者，すなわちボリシェヴィキからとりつけようとした。」[131]

今日のポーランドにおいては，ルクセンブルクとレーニンの立場は基本的に一致してい

126) 同書，13-24.
127) 同書，104-105.
128) 同書，157.
129) 同書，636.
130) Najdus, 前掲書，6.
131) 同書，352.

たとされ，また一致していた面を強調しなければならないとされる。[132] ティフはこれをさらに進めて，ルクセンブルクはレーニンを補充したものと理解されるべきだ，と主張している。[133] もしレーニンがすでに同時代において補充を必要とする存在であったとすれば，その権威はもはや完全ではあり得ないだろう。ティフの主張は，ルクセンブルクがレーニンと対等の独創的な思想家・活動家であったという結論を暗示している。

ポーランドの研究者が追求しているのは，ルクセンブルクの思想と行動の容赦ない歴史的条件づけ (uwarunkowanie historyczne)[134]である。これは，従来のルクセンブルク評価が，あまりにそのときそのときの政治的要請に左右されてきた[135]ことに対する反省と見做してよいであろう。ナイドゥスは，「ローザ・ルクセンブルクは歴史の審判の前にではなく，つねにわれわれの同志の審判の前に立たされている」[136] と皮肉な調子で指摘している。このような全面的な歴史的条件づけは，当然レーニンの前でも停止することができない：「ある者は，レーニンもまた生きものであり，自分の見解を一定の条件の下で錬り上げたのだということを忘れて，〔ルクセンブルクの見解を〕ずっと後のレーニンの著作と比較する。あたかもレーニンが生れたときから出来上りのはっきりした見解をもっていたかの如くである。」[137]

2. ポーランドの社会主義運動におけるルクセンブルクの位置

争われているのは，国際社会主義運動におけるルクセンブルクの位置ばかりではない。ポーランドの社会民主主義運動におけるその位置も争われている。もっともこの論争の地平線は，今のところポーランド内にとどまっているようである。

論争はどのグループが党の主流をなしていたか，ルクセンブルクとその同志か，それともより愛国主義的な分子か，ということをめぐって行なわれている。この論争は，ポーランドではきわめてアクチュアルな問題と絡んでいる。なぜなら愛国主義をそのレーゾン・デートルとしている今日のポーランドの支配政党，統一労働者党にとって，その直接の前身とされる SDKPiL が愛国主義的な政党であったか否かは重大な関心事であらざるを得

132) „Spory ideologiczne ...," *Z pola walki*, XIV (1971)-1, 85, 98, 100, 104, 107-108, 134-135, 155; Sierocki, „Sesja naukowa ...," *Z pola walki*, XIV (1971)-3, 210, 211. かつて西川正雄氏はルクセンブルク評価のタイプをレーニンと対立した「からこそ」と，2)「にも拘わらず」の二つに分けたが，今日のポーランドにおける評価はこのいずれにも属さない。レーニンとの関係を基準として分類すれば，3) レーニンと一致したからこそという新しいカテゴリーを設けなければならないだろう。西川正雄，『ローザ・ルクセンブルク解釈の流れ』，「歴史学研究」，239 号 (III. 1960), 46 を見よ。しかしポーランドにおける評価には論理的な矛盾がある。これについては後段 166-167 頁を参照せよ。

133) „Spory ideologiczne ...," *Z pola walki*, XIV (1971)-1, 85. コハンスキは，ルクセンブルクの活動は「レーニン主義への道を拓いた」として，ルクセンブルクをレーニン主義の先駆者の如く見ている。同速記録，108 を見よ。

134) Sierocki, „Sesja naukowa ...," *Z pola walki*, XIV (1971)-3, 207, 208.

135) ポーランドの歴史家はこれを現在主義 (prezentyzm) と呼んでいる。Kochański, *SDKPiL* ..., 9; Sierocki, „Sesja naukowa ...," *Z pola walki*, XIV (1971)-3, 216 を見よ。グラドフスキは東ドイツで出版されたラシッツァ，ラーチュンによるルクセンブルク伝にも「現在主義」の匂いを臭ぎつけている。グラドフスキによる同書の書評：*Z pola walki*, XVII (1974)-2, 351 を見よ。

136) Sierocki, „Sesja naukowa ...," *Z pola walki*, XIV (1971)-3, 213. ナイドゥスは SDKPiL 史についても従来「あまりにも裁判官が多過ぎ，あまりにも研究者が少な過ぎた」と述べている。Najdus, 前掲書，7 を見よ。

137) Sierocki, „Sesja naukowa ...," *Z pola walki*, XIV (1971)-3, 213.

ないからである。

1970年2月に「ス・ポラ・ヴァルキ」誌編集部の主催で行なわれた討論会「国際主義——愛国主義——民族主義」[138]は，この問題をめぐる対立をはじめて明るみに出した。同年10月のルクセンブルク生誕百年記念討論会においても，ジュイホフスキとソプチャクがこの問題をめぐって論争を交している。[139] 1972–73年にはミフタとタルガルスキが「ス・ポラ・ヴァルキ」誌，その他において論戦を展開した。[140] ジュイホフスキとミフタの見解は，つぎのモチュルスキのことばによってもっとも簡潔にまとめられていってよいであろう：「ローザ・ルクセンブルクは，ポーランドの活動家であったというよりもむしろ国際的な活動家・ドイツの活動家であり，ポーランドの社会主義運動・マルクス主義運動のなかでは本質的に周辺に位置する存在であった。ポーランドの労働運動は圧倒的な部分が独立運動にコミットしていた。」[141] このようなルクセンブルクの役割の評価は，60年代にポーランドの政界・文化界において非常に有力となった所謂パルチザン派の運動[142]と関係があるものと思われる。

しかしこのような評価に組しない研究者も多い。たとえばソプチャクはつぎのように述べている：「数は多くないが若干の歴史家は，統一労働者党の前身の一つであるSDKPiLを没民族的であったという批判から救い出そうという高貴な意図に導かれて，かれらの見るところではこの点であまり好感の持てないローザ・ルクセンブルクをSDKPiL全体，あるいは少くともこの党の大多数の活動家と対立させ，党のなかに独立を志向する強力な潮流が存在していたことを探りあてようとしている。」[143] ソプチャクは，SDKPiLの指導者は多くの問題で対立したけれども，とくに民族問題で分裂するということはなかった，党は全体として統一されており，1911年の分裂後も中央本部派と分裂派とのあいだに綱領

138) „Internacjonalizm—patriotyzm—nacjonalizm w dziejach polskiego ruchu robotniczego. Stenogram dyskusji（ポーランドの労働運動史における国際主義—愛国主義—民族主義．討論速記録），“ ***Z pola walki***, XIII (1970)-2, 107–166, とくに130–131, 153–154を見よ。

139) „Spory ideologiczne ...,“ ***Z pola walki***, XIV (1971)-1, 87–88, 158.

140) N. Michta, „O rzetelną ocenę SDKPiL. Na marginesie książki A. Kochańskiego (SDKPiLのまともな評価について，コハンスキの著書の余白に），“ ***Z pola walki***, XV (1972)-3, 121–146; 同, „Słowo o J. Marchlewskim,“ J. Marchlewski, ***Ludzie, czasy, idee***, 21–30; J. Targalski, „, Jak to właściwie było‘（「それは本来いかにあったか」），“ ***Z pola walki***, XVI (1973)-4, 53–65; N. Michta, „Tak to właściwie było ... w odpowiedzi J. Targalskiemu（それは本来こうであった…タルガルスキに答えて），“ ***Z pola walki***, XVI (1973)-4, 67–82.

141) L. Moczulski, „Ojciec socjalizmu polskiego（ポーランド社会主義の父），“ ***Stolica***（首都），28. XI. 1971, 11. これは J. Targalski, „, Jak to właściwie było,‘“ ***Z pola walki***, XVI (1973)-4, 55に引用されている。

142) パルチザン派の運動については，筆者は，まもなく刊行される予定の「東欧史」，東京(山川)において若干立入って説明を行なったので参照されたい。ミフタが若干反ユダヤ主義的傾向をもっていることについては，タルガルスキがそのミフタ批判においてほのめかしている。Targalski, „, Jak to właściwie było,‘“ ***Z pola walki***, XVI (1973)-4, 64–65を見よ。ミフタは第二次大戦中のパルチザン活動について，国防省出版局から一書を刊行する予定と伝えられる：N. Michta, ***Z lat walki***（戦いの年月から），Warszawa 1975 〔***Zapowiedzi wydawnicze***, 41/4283/1974〕. ミフタはパルチザン派の機関誌である ***Miesięcznik literacki***（文学月報）誌にしばしば寄稿している。たとえば同誌1975年2号にはパルチザン派の領袖とみなされているモチャル（M. Moczar）とミフタが同時に寄稿している。

143) „Spory ideologiczne ...,“ ***Z pola walki***, XIV (1971)-1, 158.

問題をめぐる対立は生じなかった,[144]と説いている。

しかしそのソプチャクも，ルクセンブルクの立場が国内の労働者によって受容された痕跡がないこと,[145] また党の公式文書によっても承認を受けていないこと[146] などをつけ加えるのを忘れない。ソプチャクはまた，ルクセンブルク独特の，ポーランドでもドイツでもフランスでも全く同じように革命を「する (robić)」という「普遍主義的な」国際主義を批判し，つぎのように述べている：「もっとも親しい友人〔ヨギヘス＝ティシュカ〕宛の書簡においても，周知の他の人々宛の書簡においても，ルクセンブルクの個人的，政治的な運命がその意識において有機的にポーランドの運命と結びついているということが感じられない……。〔亡命生活が長過ぎた結果ルクセンブルクは〕独立に対するポーランドの労働者の態度を，労働者との会話，直接の接触からというよりも，むしろ経済統計・新聞すなわち間接的な資料から帰納した。……かのじょの見解を決定したのは，大衆の心理・気分というよりも理論的なモデルであって，これはおのずから大衆の心の奥に潜む愛国主義の負荷を十分に評価することができないという結果を招かざるを得なかった。」[147] このような評価は，スターリン主義時代の「根無し草のコスモポリタニズム」という評価を想起させる。はたしてルクセンブルクの立場は労働者階級の一定部分の気分を反映していなかったか，公式文書ではないにしても事実上大多数の同志によって受け容れられていなかったか，ルクセンブルクが革命を「する」ことを説いたか，労働者大衆の心の奥に愛国主義の負荷が宿っていたという仮定は正しいか，どの一つをとってみてもソプチャクは疑わしい仮定に立って議論をしていると言わなければなるまい。このようにルクセンブルクの非愛国主義的な態度は，多くのポーランドの研究者にとってなおエモーショナルな反撥を起させる因となっているようである。

しかし，ルクセンブルクの立場が SDKPiL の主流をなしていたという見方において一貫している研究者もないわけではない。たとえばティフがそうである。ティフは，民族問題における SDKPiL の誤った立場をその指導者が亡命していたとか，国内の現実から切り離されていたとかいうことによって説明するもの，あるいは，SDKPiL の指導部の「政治家」が「悪かっ」たが，大衆は「健全」であったという説明を行なう者をきびしく批判している：「SDKPiL 研究の過程において入手し得た史料から判断できるかぎりでは，…指導者の表明した理念は，SDKPiL において……党員大衆の圧倒的多数，また労働者階級の一定部分の気分の発現であった。……〔独立に反対する〕気分は事実一部のワルシャワの労働者に存在したのであり，ローザ・ルクセンブルクのような指導者が，スイスの亡命先からワルシャワの労働者に押しつけたのではない。……史料に依拠することなく，SDKPiL の指導的な活動家のあいだの民族問題における見解の相違を過大に解釈……する見解をときに見受ける。しかし 1904 年以後，すなわち SDKPiL が一政治集団から広汎な大衆運動に支えられた政党になって以後，SDKPiL 内の民族問題についての意見の相違

144) 同速記録，166.
145) 同速記録，161.
146) 同速記録，162.
147) 同速記録，164.

を示唆するたった一つの記録も——この時期の記録はかなり豊富に保存されているのだが——発見されないというのが事実である。」[148] こうしてティフは，歴史を恣意主義的に扱うことを強く戒め，歴史家の第一の任務は，いかなる客観的条件が存在したか，またいかなる構想，いかなる社会的企図がそれによって生み出されたかを追跡し，理解することであると説いている。

3. 「ルクセンブルギズム」の問題

ルクセンブルクは，けっして自分の見解をひとつの体系にまとめあげようと試みなかった。ルクセンブルクの思想がひとつの体系をなしているという見方は，おそらくルカーチ (G. Lukács) に発するものであろう。1920年代後半には，この見方が強くなり，レーニン主義に対立する一貫した立場としてのルクセンブルクの思想が強調された。共産党文献においては，これはとくにルクセンブルギズムの名をもって知られている。

すでに指摘したようにポーランドの研究者は，レーニンとルクセンブルクの立場は基本的に一致していたという見方に傾いている。当然のことながらポーランドにおいては，レーニン主義と対立する一貫した体系としてのルクセンブルギズムという考え方は，時宜に適したものではなくなっている。たとえば，ティフは1970年の討論会においてつぎのように述べている：「〔もしルクセンブルクとレーニンとの対立という観点からのみものごとを見るならば〕われわれはそれによって——逆説的に聞こえるかも知れないが——結局西側の反共評論家がやっているのと同じことを別の仕方でやることになる。まったく異った意図から出発しているにせよ，かれらはわが国の一部の歴史家がやっているのと同じようにローザ・ルクセンブルクをレーニンと対立させているだけなのだ。これは一度考えてみる価値のある，またなんらかの結論をひき出してみる価値のある一致ではないか。」[149] ティフの呼びかけに応えて，同討論会において，ルクセンブルギズムという呼称の廃止を提案する者も現われた。[150]

しかしレーニンとルクセンブルクの立場の対立を示す事実はあまりにも多い。ポーランドの研究者は，両者の対立の原因をそのときそのときの具体的な状況に求め，一時的な性格のものとして説明しようとしている。たとえば，カンツェヴィチはつぎのように述べている：「……私は，〔ルクセンブルクの犯した誤謬が〕一貫した (spójny) 体系をなしているとは考えないし，個々の問題の誤った把握が，ローザ・ルクセンブルクによって一貫して適用されたとも考えない。逆に，具体的な状況との関連において，ポーランドの活動家（ルクセンブルクのこと——伊東）は，自分の態度を文字通り一日毎に変える能力を有したのである。」[151] このような極端な歴史主義は一つの危険をはらんでいるように思われる。それは，もしルクセンブルクの個々の問題における立場がもっぱら具体的な状況に対する

148) „Internacjonalizm—patriotyzm—nacjonalizm," *Z pola walki*, XIII (1970)-2, 130-131.
149) „Spory ideologiczne ...," *Z pola walki*, XIV (1971)-1, 85.
150) 同速記録，89(ジェイホフスキ)，141(ジェヴルスキ)．ポーランドにおけるルクセンブルギズム理解について，ジェヴルスキは別の論稿において興味深い素描を行なっている：J. Dziewulski, „W kwestii Luksemburgizmu（ルクセンブルクの問題について)," *Julian Marchlewski. Sesja naukowa ...*, 221-239.
151) „Spory ideologiczne ...," *Z pola walki*, XIV (1971)-1, 111.

反応として把えられるならば，いずれも偶然的な性格のものとなり，ルクセンブルクの思想と行動をそれ自身として全体的に把握することが困難となることである。事実ポーランドにおいては，一般に，ルクセンブルクの立場のうちたまたまレーニンのそれと一致したものを強調して，これをルクセンブルクが基本的にレーニン主義者であったことの証左とし，レーニンの立場と対立したものは状況的・偶然的なものとして過少評価する傾向があるように思われる。

たとえば，ティフはつぎのように述べている：「ルクセンブルクのポーランド語による評論活動において，民族問題はかなり大きな位置を占めているが，かのじょの著作活動全体のなかでは，この問題は小さな断片を占めているにすぎない……。ついでながら，非ポーランド系の労働運動の活動家——レーニンを除いて——にとって，ルクセンブルクの民族問題における立場は，かのじょの著作活動のほんの周辺に位置する問題をなしているにすぎない——もっともこれはかれらによる民族問題の軽視をも証しているのであるが——のであって，かのじょ自身がこの問題について外国語で書いた僅少の論文を除いて，このテーマについての最大の著作『民族問題と自治』も含めて，民族問題についてのほとんどいかなる論文も，今日に至るまで〔ポーランド語から〕外国語に翻訳されていないのは特徴的である。」[152] ティフがここで外国における関心状況を紹介しているのは，ポーランドの研究者がルクセンブルクの民族問題における「誤謬」に執着しすぎて，他の側面における功績を見落しがちであるのを矯正しようという意図からである。しかし皮肉なことに，ティフが外国における民族問題に対する関心の欠如を指摘した直後に，ルクセンブルクの民族問題論は大量にドイツ語に翻訳され，まもなくわが国においても紹介されるに至った。

民族問題の正しい位置づけなくしては，ルクセンブルクの思想と行動の理解は難しいと言わなければなるまい。ルクセンブルクにおける体系の否定は，民族問題の位置づけを困難にしたという意味で，必ずしも好ましい結果をもたらしたとはいえないように思われる。

4. 党組織と民主主義

革命政党の組織のありかた，民主主義の問題は長い間ルクセンブルクをめぐる論争の中心をなしていた。この論争は70年代においても継続され，ますます活発となる気配を見せている。

西ドイツのシュトローベルは，この問題についても東西文明の相剋という観点から見ている。たとえば1904年の有名な論争について，シュトローベルはつぎのような性格づけを与えている：「レーニンがブランキスト的陰謀組織という組織政策的な道をさらに一歩先に進んだのに対して，ローザ・ルクセンブルクとレオ・ヨギヘスは，組織政策理論においてSDKPiLを完全に西ヨーロッパの社会民主主義運動の路線に導いた。こうして国際的連帯によって規定された東方地域におけるその紐帯にもかかわらず，ポーランドの党は

152) 同速記録，81. ソヴィエトの史家ヤジュボロフスカヤは，ヴァレツキ(M. Walecki, *Р. Люксембург. Шаг за шагом*, Москва/Ленинград 1926 への序文23頁）を引いて，ポーランドにおけるルクセンブルクのこの著作の意義をも否定しようとしている：「ポーランドの社会民主主義運動，ポーランドの労働運動において，この著作はいかなる重要な役割も演じなかった。……それは，実際のところ，いかなる実践的・革命的価値も有しなかった。」Яжборовская, *Идейное развитие* ..., 254.

最終的に西方に回帰した。」[153]

これに対してソ連の研究者ヤジュボロフスカヤはつぎのように述べている：「ローザ・ルクセンブルクは，実際政治的領域においてロシア社会民主労働者党の状態にではなく，ポーランドとドイツの労働運動の政治的経験に依拠していた。……ドイツ社会民主党の指導部は下からの運動の発展を考慮せず，議会主義のみを志向し，党を保守的で，大衆のイニシアティヴを圧殺する機構に変えていた……。同様にポーランド社会党においては，右派の指導者のグループが全組織を自分の路線に縛りつけていた……。」[154] このようにルクセンブルクの批判は，何よりもドイツ社会民主党やポーランド社会党を念頭においたものであった。それだけにそのロシア社会民主労働者党の「内部問題への干渉」は，事実の裏付けを欠くものとならざるを得なかった：「かのじょは，新しい型の党のためのレーニンの闘争の意義を理解せず，ロシア社会民主労働者党内部の闘争の具体的な分析のかわりに，二次的な問題に注意を集中し，レーニンが指摘したように『論争の真の根源』を明らかにしなかった。」[155] したがってルクセンブルクのレーニン批判は「権限外のことであり，誤っており，メンシェヴィキを元気づけるもの」[156]であった。

このようにソ連の研究者が，ルクセンブルクの批判を主としてドイツ社会民主党に向けられたものとみなし，レーニンに対する批判は見当違いとしているのに対し，ポーランドの研究者は，ルクセンブルクの党組織論，民主主義論の一般的意義を強調する傾向がある。たとえばティフは1904年の論争を簡潔に「ルクセンブルクは，レーニンの著作『一歩前進，二歩後退』を党生活の過剰な集権化傾向のゆえに批判した。ルクセンブルクに対する回答においてレーニンは，自己の立場をロシアの特殊な条件によって正当化した」[157]と性格づけている。ティフが，レーニンのなかに「新しい型の党」を理論づけた者ではなく，ロシアの特殊な条件を理由に自己弁護している者を見ているのは特徴的である。ティフはさらに，1918年の「ロシア革命論」についてつぎのように述べている：「ボリシェヴィキの活動において何が可能であり，何が必然であったかということに関する歴史的・具体的問題については，ルクセンブルクの理解の程度は限られている……。これに対して革命的なプロセスの性格，代議機関の活動のありかた，大衆の政治的創造性の役割，この創造性を実現するための必要条件，《指導部—大衆》の相互関係についてのかのじょの言及は，かのじょの社会哲学の構成部分である。」[158] このようにティフは，「ロシア革命論」のなかのボリシェヴィキ批判を具体的な情勢判断にかかわるものと，根本的な政治姿勢にかかわるものとに分け，前者は偶然的な事情に左右されたかもしれないが，後者はそうではないとし，とくに民主主義にかかわる発言は後者に入れている。つまりティフは，従来の共産党系史家の理解と異って，「ロシア革命論」における独裁政治批判をルクセンブルクの一貫した立場の帰結とみなし，その永続的価値をほのめかしていると言ってよい。

ルクセンブルクの党組織論・民主主義論に対するポーランドの研究者のこのようなポジ

153) Strobel, 前掲書，198.
154) Яжборовская, *Идейное развитие* ..., 160–161.
155) 同書，160.
156) 同書，161.
157) Tych, „Luksemburg, Rozalia," *Polski słownik biograficzny*, XVIII, 123.
158) 同書，123.

ティヴな評価は，けっして偶然ではない。これはつぎのような背景に基くものと言ってよいだろう：

1) ルクセンブルクの党組織論は，ポーランドの党とロシアの全体党との統一というアクチュアルな問題を背景にして生まれた。ルクセンブルクは合同後のポーランド組織の幅広い自治を強く主張し，全体党の指導者，なかんずくレーニンと衝突した。ソ連に対するポーランドの自主性に関心をもつ現代のポーランドの研究者は，ルクセンブルクの党組織論をこのような背景において理解しようと努めている。たとえばナイドゥスはつぎのように述べている：「SDKPiL 内には自己の指導部の権限について多くの論議があった。しかしルクセンブルクが，ロシアの全体党の中央委員会の，地方組織に対する大きな権限を攻撃したことについては，全く異論がなかった。けだし，中央委員会の権限の制限は，あり得べきロシア社会民主労働者党との合同後，ポーランドの党の自立性の保持を容易としたからである。」[159] ナイドゥスによれば，SDKPiL の指導者の構想において合同後の党組織と将来の国家構造とのあいだには密接な関連があった。ルクセンブルクのように党レヴェルにおける自治を主張した者は国家レヴェルにおける自治を，ザレフスキのように党レヴェルにおける連邦を主張した者は国家レヴェルにおける連邦を，ヴォイナロフスカのように党レヴェルにおける独立を主張した者は国家レヴェルにおける完全な自立を主張した。[160] 自治を唱えたルクセンブルクも，かのじょが自治のもとに何を理解していたかを調べてみると，ほとんど連邦主義に近い立場をとっていたことが判明する。[161]「SDKPiL の党員のなかには，集権主義的な全体党構想の支持者はいなかった。これは十分納得のいくことであった……。」[162]

2) 他方においてポーランドの研究者は，ルクセンブルクが党内民主主義を主張したこと，また SDKPiL に民主主義が存在したことに強い関心をもっている。これは今日のポーランドの支配政党，統一労働者党内における民主主義の欠如に対するひとつの批判とみることができよう。たとえばナイドゥスは次のように述べている：「これは，幅広い底辺の党活動家から党の上部機関への，また市委員会からひとりひとりの党員への情報の流れを可能とするシステムであり，党の活動家が指導機関の活動をコントロールする原則に立ち，全党の活動家が党の政治路線の形成に共同参加することを保証するシステムであった。」[163] あるいはまたコハンスキは次のように述べている：「自立的な思考の努力，慣行に基いて生まれた権威に対する不服従は，SDKPiL の活動家にとって高度に特徴的であった。かれらには，党の指導者の見解をたんに組織のヒエラルヒーにおけるその地位のゆえに受けいれるということは無縁であった。」[164] SDKPiL における党内民主主義のこのような理想化は，今日の現実に対する批判の役割を果している。とくに 1970 年の 12 月事件の直後には，ルクセンブルクに戻れという声が党知識人のあいだに高まった。ルクセンブルク生誕百年記念研究集会においてコハンスキは，「理論的・根本的な問題は，選ばれた少

159) Najdus, 前掲書，173.
160) 同書，131.
161) 同書，155.
162) 同書，162.
163) 同書，172.
164) Kochański, *SDKPiL 1907-1910*, 53.

数の人々だけではなく，党全体の討議の対象となるべきであるというローザ・ルクセンブルクの定式は，かのじょの党内民主主義観に対応している。……ローザ・ルクセンブルクは，党の課題はとくに社会革命に際して大衆の蜂起を技術的に準備し，実行することであるという発想から訣別した」[165]と述べている。同集会におけるソプチャクの発言はいっそう具体的である：「労働者大衆の革命的イニシアティヴに対するかのじょのこの信頼は，十分に根拠のあるものであった。ポーランドにおける先頃の12月事件は，労働者大衆の立場，指導者層の政策・措置に対するその態度が社会主義体制の条件のもとにおいてもなお巨大な役割を演じること，あらゆる種類の社会主義の歪曲にきわめて敏感に反応するバロメーターであることを，われわれすべての肝に銘じさせた。……こうしたことがすべて，他の多くの原因に加えて，ローザという人物をわれわれに近づけ，関心をもつに価するものとする。そしてかのじょの遺産は，なお今日のわれわれの思考にインスピレーションを与えるのである。」[166]

5. 経済分析と経済理論

ルクセンブルクの経済学上の二つの業績，「ポーランドの産業的発展」と「資本蓄積論」は従来多くの論議をかもしてきた。ルクセンブルクの業績をめぐる論争は70年代に入ってから，ポーランドにおいて新たな展開を見せ，注目すべき観点を生み出している。しかしこの問題は含蓄するところが非常に大きく，別稿において取扱うべきテーマであると思われるので，本稿においてはつぎの二点だけを指摘するにとどめたい。

ひとつは，ルクセンブルクのポーランド経済史の分析が基本的に正しかったという結論である。従来は，ロシアの経済的統合がポーランドの独立を不可能とするというルクセンブルクのテーゼは，第一次大戦後ルクセンブルクの予想に反してポーランドが独立したことをもって根本的に覆えされたと考えられてきた。しかしポーランドの新しい研究は，第一次大戦後ポーランドが独立したのは，多くの予見し得ない経済外的要因が働いたからであって，ルクセンブルクの経済分析そのものは誤っていなかった，むしろ逆にルクセンブルクの分析は，政治的独立を達成した後も経済的独立を達成し得ず，多くの困難に逢着している今日の第三世界の諸国を見るとき，きわめてアクチュアルな意義をもっている，と主張している。もっとも，ポーランドの研究者は，ルクセンブルクの経済分析を基本的に正しいとしながらも，かのじょがそこから引き出した政治的結論——独立のスローガンの否定——は正しくなかったとしている。

従来ルクセンブルクの「資本蓄積論」は資本主義自動崩壊論として批判されてきた。しかし周知のように，ルクセンブルクの主張は，資本主義の発展が非資本主義的市場の開発に依存しているというところにあった。この見解は，ポーランドの研究者の新しい解釈によれば，資本主義の自動崩壊を意味するどころか，逆に資本主義的経済発展が《外的市場》の創出によって恣意的に操作され得ることを意味するものであった。ルクセンブルクの言う《外的市場》は，たんに文字通りに《外国市場》であり得るばかりではなく，軍需産業のような，もっぱら政府からの注文に依拠する国内市場でもあり得た。つまりポーランド

165) Sierocki, „Sesja naukowa ...," ***Z pola walki***, XIV (1971)-3, 215.
166) 同報告，210.

の研究者は，ルクセンブルクの《外的市場》の概念をケインズ（J. M. Keynes）の有効需要の概念の先駆とみなしているのである。このような関連は，つとにカレツキやロビンソン（J. Robinson）のような経済学者が指摘するところであった。しかし社会主義国においてこのような解釈が支配的になったのは，70年代に入ってからであり，しかも今のところポーランドに限られていると言ってよいであろう。[167]

VII. 結　　語

ルクセンブルク研究は1970年代に新しい段階を迎えたように思われる。今まで知られなかったルクセンブルクの東方における活動に関する史料が続々と刊行されるようになった。これにともなって従来定説とされてきたルクセンブルクの思想と行動に関する解釈の多くが疑問とされ，新しい説が提唱されるに至っている。また新しい状況において，今迄忘れられてきた側面が突然意義を獲得し，再評価されるという現象も見られる。ルクセンブルクの東方における活動の舞台となった諸国は，今日社会主義圏となっているので，今後の研究も社会主義圏における史料発掘・研究の努力に依拠するところが大きいと言わなければならないだろう。

旧稿においてはポーランドにおける研究状況を1960年代の半ば頃までしか紹介し得なかった。本稿において紹介したところから明らかなように，その後ポーランドにおけるルクセンブルク研究には飛躍的な発展があった。ポーランドの研究者のあいだにディフェレンシエーションが進行しつつあるように見えることは注目に価する。もはや社会主義圏の研究を，圏全体，あるいは一国毎に紹介することは不可能と言わなければならない。今後は，一人一人の研究者の歩みを丹念にフォローする必要があるだろう。

全体として旧稿における筆者の主張は，その後新しく発表された史料・研究によって確認を受けたと言ってよいだろう。若干の問題においては，諸外国の研究はまだまだ不十分であるように思われる。たとえば新しい研究においても，ルクセンブルクにおける二つの「民族」自決権概念，ポーランドの社会主義運動史におけるルクセンブルクの民族問題論の位置，「国内自治」の意味内容等についてけっして十分明瞭な理解がなされているように思われない。

しかし冒頭においても述べたように，本格的なルクセンブルク研究がなお続々刊行される模様であり，本稿はたんなる中間報告にすぎない。ルクセンブルクに関心をもつ者は，諸外国における研究動向を注意深く見守る必要があるだろう。

〔後書き〕 本稿の前半は，1975年3月末から4月始めにかけて，海外出張を前にしての慌しい日々に書きあげ，後半は，アメリカ中西部の大学都市を転々と旅行しているあいだに書き，最後の部分を書きあげたのは，ようやくニューヨークの旅宿においてであった。この間にカンサス大学（カンサス州ローレンス）において本稿とほぼ同内容の講演を同大学のロシア・東欧研究センターのスタッフを対象に行なう機会をもった。

以上のような事情のため，十分に推敲する時間がなく，若干冗慢な部分が生じたのは，はなはだ遺憾である。読者の寛恕を請う次第である。〔ニューヨーク，マンハッタンの旅宿にて，10. V. 1975. 記〕

---

167) この節には詳しい註をつけるのを避けた。以上は本稿151-152頁に紹介した論文，および討論会における発言に基くものである。

伊東孝之

〔追記〕 脱稿後，新たに以下の諸氏の論稿を被見することができた：松岡利道『ローザ・ルクセンブルク評価の変遷』，「経済学雑誌」（大阪市立大学），LXIII (1970)-4, 61-80；同，『ローザ・ルクセンブルク「資本蓄積論」研究への一視点』，「経済学雑誌」，LXV (1971)-4, 105-127；渡辺昭，『ローザ・ルクセンブルク「資本蓄積論」の提起した問題』，「社会科学」（同志社大学人文科学研究所），13号〔IV (1972)-2〕，69-113；同，『帝国主義論の方法としての「資本の蓄積」――ローザ・ルクセンブルク帝国主義論の根本問題――』，「経済理論」（和歌山大学），127-131合併号（1972），211-254；横山憲秀，『ポーランド時代のローザ・ルクセンブルク』，「歴史研究」（大阪教育大学），10号（1973），84-110. 本稿の問題関連においては，横山氏の論稿が注目に価する。史料的制約をもちながらも，ルクセンブルクの党概念，階級概念のポーランド的起源を探ろうと試みているのは，慧眼というべきだろう。

校正までの間に，本稿において筆者未見あるいは出版予告中として紹介した研究のうち，幾つかを入手，披見することができた：Евзеров, Яжборовская（本稿脚註46）；Dziewulski（同54）；富永論文（同80）第2部，「青山法学論集」，XVI (1974)-2, 127-157；Петрович（同109）；Орехов（同110）. Петрович のものを除き，いずれも真面目な学問論文であり，今後の研究においては必ず参照すべき文献であろう。とくに Dziewulski の書は，ルクセンブルクの経済理論解釈において新機軸を打ち出したものとして注目に価する。

Kochański のルクセンブルク伝（同38）は，著者からの近信によれば，目下校正段階にあり，今秋には上梓できるとのことである。加藤論文（同118）後半も「社会運動史」，5号に発表される予定で，すでに校正段階にあると伝えられる。なお同氏は，ロシヤ史研究会の1975年2月例会で『ポーランド解放とロシア』と題する報告を行ない，その要旨を「ロシア史研究会会報」，10. IV. 1975. 1-3に発表している。〔27. VIII. 1975. 記〕

Rosa Luxemburg in the Polish Social Democratic Movement

— A Critical Survey of Recent Literature —

Takayuki ITO

This was originally intended to be a supplement to the article by the same author: "Marxist Views on the Right of National Self-determination and the National Question in Eastern Europe. Rosa Luxemburg," *Suravu Kenkyû* (Slavic Studies), No. 18 (1973), 53-96. But the present article can be considered an independent work because it deals with a much broader range of problems than the former one: problems connected with Rosa Luxemburg's activities as a leader of the Social Democracy of the Polish Kingdom and Lithuania (SDKPiL). The survey covers publications which appeared in Polish, Russian, German, and Japanese languages between 1970-1974.

In the chapters II-V new publications on Rosa Luxemburg: bibliographies, source materials, biographies and monographs are introduced with short comments. Then in the chapter VI problems of recent studies in Rosa Luxemburg are discussed: 1) Rosa Luxemburg's politcal and historical place: East or West? 2) Rosa Luxemburg's role in the Polish Social Democratic movement; 3) problems of 'Luxemburgism'; 4) theory of organization; 6) economic analysis and economic theory.

The West German historian G. W. Strobel and the Soviet historian I. S. Jažborovskaja tend to describe the Polish Social Democrats in general and Rosa Luxemburg

in particular as wanderers between East and West–the Russian and the Western Social Democracies. But they start from opposite points of view : Strobel tries to present the Polish Social Democrats as mediators between East and West who were essentially committed to the West European idea of revolution, but in the end got under the influence of the Russian Bolsheviks in the wake of the victorious October Revolution. Jazborovskaja on the other hand wants to prove that the Poles from the beginning found themselves under the strong influence of the revolutionary movement in Russia ; after occasional deviations from the main line of Russian development, they finally found the right way to Leninism. The Polish historians agree with Jažborovskaja that the poles went essentially the same way as the Russian Bolsheviks, but they don't ascribe it to the 'favorable', as Jažborovskaja prefers to put it, influence of Lenin. They try to describe the Polish Social Democrats as people of independent thought and action who came to the same conclusion as the Russian Bolsheviks, starting from their own premises.

Among the Polish historians there has been a controversy over Rosa Luxemburg's role in the Polish Social Democracy. Recently a group of historians, prominently N. Michta, has set up a new thesis that Rosa Luxemburg and her group may have made great contributions to the revolutionary movement in Germany, but played rather a minor role in the Polish context ; it was not these internationally oriented people, but more patriotic elements that were the moving force of the SDKPiL. There are historians, however, such as F. Tych, who contradict this thesis, arguing that the internationalism up to the negation of national independence was not only an ideology of the leaders in exile, but also a strong feeling among a certain part of the working people in the country, and that Rosa Luxemburg was really the most influential figure in the Party through the entire period of the Party's existence. It seems that this controversy is still going on. The author points out to the affinity of the former point of view to that of the so-called 'partizan' group in the contemporary Polish politics.

Communist historians today tend to emphasize that Rosa Luxemburg's ideological and political points of view are very close to, almost identical with Lenin's. It is quite logical that some Polish historians go so far as to deny the existence of Luxemburgism as a separate ideological system. But if Rosa Luxemburg was a Leninist, why so many differences between Lenin and Rosa Luxemburg ? Communist historians answer that the differences, being caused by different conditions under which they worked, don't touch upon their basic standpoints which are supposed to be identical. However, through her whole life Rosa Luxemburg consistently defended many of her positions which sharply differed from Lenin's, such as her position in the national question. The differences were sometimes so fundamental that Rosa Luxemburg could hardly be called a Leninist. But if she was not a Leninist, what was she then ? The author points out to the difficulty which Communists historians, denying the existence of Luxemburgism, are confronted with, namely the difficulty to understand Rosa Luxemburg's positions as a self-consistent and interdependent whole.

Rosa Luxemburg's theory of organization has attracted much attention of non-

Communist radicals. But recently also some Polish historians, such as W. Najdus and J. Kochański, have shown strong interest in this topic. The author gives two reasons why the Poles have suddenly gotten interested in Rosa Luxemburg's theory of organization: 1) They are interested in Rosa Luxemburg as a defender of the interests of the Polish Party against the centralistic all-Russian Party. Here, paradoxically, the opponent of national independence on the state level emerges as a defender of complete autonomy on the Party level. 2) The uprising of the workers on the Baltic coast in December, 1970, showed what terrible consequences the lack of internal democracy in the ruling party could have. Some of the Party intellectuals rediscovered Rosa Luxemburg's theory of organization in their search for a new Party model.

There is a revival of interest in Rosa Luxemburg also in the field of economics. Polish economists J. Dziewulski and T. Kowalik made important contributions to this direction. 1) Rosa Luxemburg's analysis of economic development of 19th century Poland has been believed to be erroneous because Poland became independent against her prediction to the contrary. Polish economists question this traditional view. They argue that the fact itself that Poland became independent doesn't yet refute Rosa Luxemburg's economic analysis because Poland became independent thanks to many non-economic factors. They conclude that her analysis as a whole was not wrong; only the political conclusion she drew from the analysis, i. e. the negation of independence, was erroneous. 2) Rosa Luxemburg's theory of capital accumulation has been much criticized in Communist literature as a theory of automatic disintegration of capitalism. It was Western economists such as J. Robinson that tried to revaluate Rosa Luxemburg from the viewpoint of growth theory. It seems that such an approach has become acceptable also in a Communist country: Poland. In the new interpretation Rosa Luxemburg's theory doesn't necessarily mean that capitalism will disintegrate automatically; on the contrary, it implies that the economic growth under capitalism can be manipulated by creation of 'external markets', i. e. foreign markets or state sectors (e. g. government expenditures for military purpose). The concept of 'external markets' in this sense is very close to the Keynsian concept of 'effective demands.'

In spite of a flood of literature on Rosa Luxemburg the Polish-Russian backgrounds of her thought and action are still little studied in the Western world with the exception of Strobel's important contribution. In this field we are heavily dependent on the publications in the Socialist countries. It is very encouraging that in recent years they have begun to compile comprehensive bibliographies and to publish source materials and research results on this topic. What is more interesting and certainly more important is that a process of far-reaching differentiation is to be observed in recent Communist literature on Rosa Luxemburg. It seems that there is now much to be done for researchers in the West.